091703-000-9

特10-406

滑稽長屋

痩々亭　骨皮道人／著

M26

DBO-0175

特10
406
滑稽長屋

滑稽長屋

骨皮道人著

昔し本郷は菊長屋と稱する大名屋敷ありたれど、今ハ文明に伴て大学校となりたれば、官の名は那邊へか逐電して目明と雖も、又た深川に喧嘩長屋と稱する野蠻人種の集會所あれど、是も開化の風に吹倒されて今ハたゞ落語家の口に其由來を殘すのみ、其他いろは長屋百軒長家など古老の茶呑ばなしには聞ど、確乎よ斯樣な長屋のありしものなるや否やは知れ難し、去なから長家と云ふのハ、種々樣々の人が住居をして居る處なれば、昔しハ扱かき只今では隨分奇態な話しあり、开を種として道人が春の日永の徒然よ、欠伸を止るまじないかた〳〵先づ第一

よお目出たく筆卸しする引越女房

○第一　引越女房

間口二間と云へば大層立派なやうに聞ゆれど、間口の割合には奥行の短い一間半、一寸見た處では六畳一間のやうなれど、其中で三尺の洗ひ場に三尺の板の間、夫に家不相應なる一間の戸棚がつりて居るゆゑ、夫是を差引ば全くの畳數は都合四枚、處々よ焼つ焦しの疵はあれど、砂糖袋の古いので根氣よく膏藥張がしてあれば、穴だけは先づ隠れて居る、表と裏の戸は餘ほど能く機嫌を取らねば旨く締らぬ樣子然れども家主の身よ取ては是でも不動産の一部分、表に貼出した貸家の札、雑作畳建具ッックリ附て家賃が八十五錢、尤も敷金なしの前金拂ひ、八十錢ゝ宜けれど五錢の半端が氣

に食ぬとは借人の言草、併し五六ヶ月のあいだ神妙よ拂へば、半端だけは直下をして遣ふと云ふ家主の胸勘定、その胸勘定は當よならねど、先づ手輕に遣入る處から、エヽ、儘よ尺蠖の縮むゝ仲んが爲なりと、大道講釋の受賣説を尺度にした叩き大工の松公、いつまで棟梁の躊をかぢッて居ても限がないと、急よ奮發心を出しての新家持、棟梁も承知の上で、奢ってくれた大枚五圓、この五圓を豫算の柱として夜ル浦園から鍋釜徳利椀皿小鉢まで、一通の揃へやうとは中々

の大骨折、去ながら持べきものは善き友達、ソレ松公が世帶を持のだ自己も行くから手前も來いと、自腹を切ての只働き、何でも新しい物よりは古物を買ひ集めるが安上りだと一人が古道具屋へ馳げ附て日用品を買て來れば、又た一人は家に居て棚をつゞ火吹竹を拵へるなど、面白半分の糊づけ流儀、さう斯して家内だけの事はザット纏り、向ふ三軒両隣りへの配り蕎麥も相濟たり、處でモウ一ッお目出度話しは、今夜直に花稼さんの輿入れがあると云ふ一件、是れは東京の裏店社會によくある習ひ、改めて嫁を取ると云へば、イクラ貧乏世帶でも、夫れ相應に準備もせねばならず、又た隣り近所への外見もあれば、それ是の費用と外見とを省かんが爲よ、何處からか夫婦づれで引越て來たと見せかける實

は誤魔化しの簡便法、松公も或人の勧めによつて、此の簡便法を用ゐるとは豫ての約束、縦ひ唐獅子の化物南瓜の亡者見たやうな婦人でも、女房と極れば純然たる女房、借金取が押掛て來るのと違つて、女房が來ると思へば何となく心嬉しい、彼方へ向てはニコ〳〵、此方へ向てはニコ〳〵、無暗に莞爾ついて居るのを見て、手傳ひよ來て居る友達が難だ眼だと愚弄うち、日の暮たのを幸ひに媒妁人の八兵衛が、コッソリ連て來た頗る劣嬢、小さな風呂敷包を手に提て、最も極りの悪さうな有樣は流石に人情、そこを八兵衛が氣轉を利して八兵衛「お竹さん此處いお前さんの家ですよ、其樣に何も遠慮するにやア當らないぢやないかァハ、、、、と先づ媒妁人から打解れば、傍に居る源公も尻馬に乗て源「本

當にさうだ、是から永い月日を毎日交際するのよ、其樣よ遠慮なて居られちやァ窮屈で仕方がねへと、野郎相應な合槌を打て居る中、へイお待遠樣と持つて來た剩身と煮肴、兎も角も儀式の眞似だけはと、茶呑茶碗で三〻九度の祝杯を濟せ、夫から例の牛飲馬食、おひ〳〵醉の廻るにつれて、都〻一葉唄を迂鳴もあれば、皿小鉢を叩いて囃すもあり、中にも八兵衛は胴魔聲を張りあげて、頻りよ高砂ヤー高砂ヤーと怒鳴れば隣り長屋の隱居が目を覺して隱居「悴やお隣家でい誰か眠でも廻しなさッたのかノウ息子「ナぜね隱居「自己が先刻から聞て居ると、何だか高藏ヤーイ高藏ヤーイと云ッて無間斷よ呼んで居るやうだ

○第二　機嫌上戸

エヽイ……酒のめば何處か心の春めきてか……借金とりも黃鳥の聲てヤーがッたア畜生め……エヽイ……オイ山の神オッー兎しへ圓部六樣の御臺所かアハヽヽヽ……エヽイ……只今御機嫌よく御歸宅よ相成り申しいなり恐惶謹言と……オットどッこいしよへら〳〵へッたらへ〳〵「ドッコイお門違ひ、君の家は隣りだよ「アハヽヽヽ、是は失敬仕つッた……エヽイ……然がねへ庄さん、庄さんの前だが、君ねへオイ大將、其樣なに澁ッ面をしたまふ可からずサ……エヽイ……實アねへ大將、今日は折口へ行て餘まり延喜が惡いから、中日〳〵一寸抔一と酒落て來たのサ……エヽイ……ねへ庄さん君の前だが……酒トー女アがテーンだン……エヽイ……もしないならばだろ……ど

うだい大將……生イて此ー世に用ハナーイと、用ハない無アい、用はないよとアハ、、、、、……其處でチンテンシヤンと來て……エ、イ……世辭でまろめて氣とねてテンだろアハ、、、……然がねへ庄さん君の前だがサ君いどうも實に感心だよ、僕は酔ッぱらッたから云ふのぢやアない、が實以て君は感心の股潜りだ……エ、イ……日家の山の神なんざア何時でも君を引合ゑ出して小言を云やアがるのだ……然がねへ庄さん君の前だがサ、君は實に感心だよ、毎日〳〵降ても照ても朝早くから起てセッ〳〵と稼れでサ……エ、イ……夫れでさけも飲まず團子も食ず、何一ッ道樂テーものが無いのだから只〇助が溜るばかりだ「常談ばかり……「ナニ常談なものか……エ、イ……

夫やア本當だよ……庄さん前だがサ、君なんざア未だ若いからセッ〳〵と稼ぎたまへ、稼ぐゑ追つく貧乏なしだ、是ハ飛だお邪魔樣……オイ隊長どうだい、イヤゑ莞爾ついてるちやア無いか何か旨い儲け口があるなら半口のせて呉れ給へ……エ、イ「相變らず宜御機嫌だなア「宜ば機嫌だッて惡い惚機嫌だッてサ……エ、イ……泣て暮すも一生笑ッて暮すのも一生、笑ふ門には福來るてハア、酒なくば何の已れが櫻かな……エ、イ……マア來たまへチョ〳〵一寸待りたまへ「又た來やうよ今日は少し用があるから「マアサ其樣な頑固な事を云ひ給ふな、敵きの家でも茶一杯テー事があらァね……エ、イ……マア宜テー事よ……オイ淫所君、鬼も十八山茶も嫌ひ義花だ番茶でも一杯入れたまへ……エ

イ……お茶菓子は持參と來て、ソロ懷から二ッよ両方の袂から一ッ宛よまだ脊中から一包が出遊ばして女房「あらマア其樣なよ葬式の蒸物を持て來てどうする積りだら本當よ呆れたもんだ」「マアサか小言は後廻しよ仕たまへ……ヱヽイ……飲だ酒なら酔ざアなるめへ酔た酒なら醒ざアなるめへ酔た上での御分別テーンだ……オイ隊長常談ぢやアない上り給へよ、君はどうも開け無くて往ない……ヱヽイ「今日は何處に折口があつたと見へるな」「今日はか店の隱居が死去ッてお見送りと出掛たのよ……ヱヽイ……初さんの前だがせいくら腐るほど金があつても死で仕舞ちやア詰ら無いぢやアないか……ヱヽイ……然から僕のやうヨ一杯引かけてサ……ヱヽイ……酒でも飲ッて浮々

しやんせと來てチンテンシャンさ、氣から病ひが出るルーわいなア……イヨ感ンすテーで女房「なんだねへ狂氣とみた、お前さんは其樣な氣樂人だから本當よ困るぢや無いか「マアサ困ると困らざるは僕の胸中に在りサ、そんな人間の悪い事を云ひ給ふな……なア大將さうぢや無いか……チヤ大將はモー歸ッたかアハヽヽヽ是ハ閉口頓首だ女房「何が閉口頓首だ紙の化物ぢやアあるまいし……お前さんは其樣な呑氣な事ばかり云ッてるけれど、今日ハ米屋さんも來たし差配人さんからも取よ來てるよ「なんだッて、何を取に來てるのだ女房「おとぼけで無いよ、今日は三十日ぢやアないか、三十日だから勘定を取に來たのサ手前は能くベラ〳〵と饒舌繰る癖よ、其樣な無學文盲だから困らア、み

そかとい三十日と書のた宜か、今月は二月だもの三十日があッてたまるものか、

○第三　手紙認所

檐に掛た小さな看板その文字は手紙認め所書体は昔し風の俗様、當人よ聞バ尊圓親王の奥儀を極たと云ふか知らねど、少しく目の明た者から見れば矢張り鉄釘流の筆法、このお手際で代筆をされては、讀人が定めし困るだらうとは餘計な心配、然れど書法と云ふものは奇怪なもので、此の看板をかけて置くが爲めに、晩酌の一杯ッ、とは行かずとも煙草代位の所得はあるとの話なし、一日のこと此家へ道入て來た一人の婦人、年齢の頃は廿歳前後、手織木綿の七ッ下とその着物よ、幅の狭い太織の帯を胴中へチョキンと締め、

急ぐときには歩行より轉げる方が早さうな体格、顔の恰好から頭の様子、前掛の汚れ擂梅襦の掛工合などから鑑定しても、慥に笑評刚のお三どんなるべき女「此家のハァ旦那さんは居さッしやるかや主人「ハイ自家よ居るが何か御用かね女「アニよ妾イハァ郵便を一ッ書て貰うべェと思ふンだが、一寸くら書て下さるべェか主人「書て進ぜませう然して何云ふ事を書のだね女「其様な事を書て宜だァか其處のとこチ一ッ考へて呉ッしやれ主人「夫れやァ文言の處は此

方で作るから宜が、全体なんの用向で何處へ手紙を出す積りだね女「アニねへよ一昨日の晩にハア妾の在所から手紙が來ましたダア、手紙が來たアからチウと何の事だアか妾イハア些ッとも分りまえねへから家の權助どんよ讀で貰うべエと思ッて、權助どんや此の手紙を一ッ讀で呉ッしやいチウと、權助どんの云ふまやア、自己ア鳥目だアから夜になるとと字は讀めねへチウから、夫だらハア明日の朝でも宜からと讀で呉ッしやれチウと、明日の朝よなつても讀めねへチウだア、夫からハア餘まり人を馬鹿にして居るだアのら、妾イハア云ふまやア、是よ權助どんや其樣よ人を馬鹿にしねへでも宜かんべエ、鳥眼チウなア夜ハア見へねへのだア、雪間よなつても見へねへチウ鳥眼があんべエかチウと、權

助どんの云ふにやア、自己がの鳥眼ば鳥目だアチウだが其樣な鳥目がありまするべエか主人「アハヽヽヽ成ほど夫は珍しい鳥目だ……然して其の手紙ハ其處よ持て居るかね女「夫れはア持て來べエと思ッて方々を探したアだが、何處つッ這入ッて仕舞たアだか見へましねへだ主人「その手紙かあると返事を書のにも都合が宜のだが、ナニ無ければ無いでも宜しい、併し其手紙を誰かに讀で貰ッたかね女「讀で貰ひまたア、夫からお店の久どんよ讀で貰ッたら、妾にハア師ッて來いチウ手紙たアチウけんど妾イハア歸りましねへだ、阿父樣の了簡ちやア妾をハア瀬戸の作兵衛どんの家へ呉べエと思ッてるだアけんど妾やハア作兵衛どん家へ行なア嫌だアね、旦那さんなんざア知らッしやるめへけん

ど、作兵衛どん家の兄アチウたら何の事アねへ丸でふア化物だアね、口が横ッちよの方へッツン曲ッてゝ鼻がハアぴしやんとでよ、夫から眼が一ッしか無へでお負にハア面の皮が真黒だアから、知らねへものが見るとハア誰でも眠玉を引繰返すだア、夫だアものお前さまア外に男が無へチウぢやアあんめへし、其様な處へ行なア誰だッて嫌だんべエ

主人「なるほど分りましたよ、夫ぢやアお前さんの家から歸ッて來いと云ッて寄越たけれど、其作兵衛さんの家へ嫁よ行のなら歸るのは嫌だと云ッて遣るのだね」女「夫だアよ爾云ッて書て呉ッしやれ」主人「ハイ〳〵宜く分りました……エヽ御手紙拝見いたし候然らば私しへ早速歸るべき趣き御申越相成候處若し躁々御話しの作兵衛さんの家へ嫁に

行ためならば私しは歸る事は嫌よ座し間此段一寸ヤし上いも外の用なら其様にヤし越下さるべくい、と先づ此様な事で宜かね」女「何だかハア些ッとも分りましねへけんど、大方ほれなら宜かんべエ、夫からねへよモウ一ッ書て呉ッしやれお絹ッ子はハア壯健で居るだアか何だかチウテ書て呉ッしやれ」主人「お絹ッ子と云ふのはお前さんの友達かね」女「アニ自己の妹だアね」主人「なるほどお前さんの妹子さんか……エヽお絹は達者にて暮し居りい哉と」女「夫からハア櫛右衛門どんの無靈が取れたらア帶を一本買て遣るべエチウたけが、それひやア取れたアだか何だか間て呉ッしやれ」主人「ハイ〳〵……エヽ櫛右衛門殿の無靈は最早相當をいい哉ヤし尋ねヤし上いと」女「夫からハア阿母アが觀

音様ァへ來てへチウて居たけが、何時でろハァ來るだァか聞て呉ッしやれ主人「ハイ〳〵……エー母上は何日ごろ觀音様へぼ參詣に御出成されし哉伺ひ度しと女「夫からハァ此間彦衆が來たァ時よ仙煮をハァ些少べェ屆けて遣たァだが屆いたァか何だか聞て呉ッしやれ主人「ハイ〳〵……エー、此間彦衆が歸村の節仙煮を少〻ぼん屆け申し上し處御受取下されし哉御尋ねヤ玄上しと女「夫からハァ舍弟にあんまり惡戯て阿母ァに世話ァ燒せるなァチウて呉ッしやれ主人「ハイ〳〵……エー、餘りいたづらをして母上はお世話を掛ぬ樣にと舍弟へ御申しつけ下さるべく候、と是で宜かねェ女「夫でハァ宜かんべェ……夫からハァ最一ッ斯う書て呉ッしやれ、去年私が云ふ通りに仕ねへもんだァから折

角丹精して作つたァ芋をハァ皆な腐敗して仕舞たァけが、今年やァハァ其樣な事を仕ちやァ成んねへチウて呉ッたやれ主人「ハイ〳〵女「夫のらハァ瀬戸のお花さんにも崖のお鶴さんにも私がハァ宜しく云ッたァチウて書て呉ッしやれ主人「ハイ〳〵女「夫からハァお竹のお竹の馬鹿野郎ヤイチウて書て呉ッしやれ……何が可笑いだァよ主人「夫でモウ宜かね、書事はモウ無いかね女「書て貰ひ度てたァまだあるだァけんどお前樣がハァ笑はッしやるだァもの主人「ナニ笑やァしませんよまだ書く事があるならどうせ筆の序だから何でも書てあげるよ女「アニ止ますべェ、モウ夫で宜から夫を呉ッしやれ主人「是で宜けりやァ上書をしてあげやう「アニ其樣なものァ書ねへでも宜だァ主人「然ッ

てお前さん郵便よ出すにやァちやんと狀袋へ入れて、何處の誰と名宛を書、なけりやァ往ない女「アニ其樣な事ァ宜だアお前樣ァ先刻からハァ笑ッてべェ居さッしやるだアもの、何を書、しッたァかハァ知れやァ仕ねへ、自家ィ歸ッて久どんにでも讀て貰ッて、夫からハァ手紙にこゝれへて貰うから夫で宜だァ主人「さうかね夫ぢやァさうして貰ひ成さい……エヽと夫では書賃を五錢だけ置て往て下さい女「アニをへ五錢チウなァ何の錢だァよ主人「その手紙の書賃が五錢サ女「アラマァ何たらとんだんべェ呆れたもんだアか前樣アハァ錢を取て書、ッしやるのかや主人「錢を貰は無けりやァお前さん商賣よならあいぢやァないか女「私ィハァ錢を取らッしやるかウ些ッとも知りまゝねへだ……夫ぢ

やァハァ止ますべェよ久どんよ書て貰やァ只で出來るだアもの

○第四　ひやかし男

三尺の臂掛窓からノッソリと顏を出した一人の男これは此長屋中にて何よ彼の差別なく物事を愚弄のよ妙を得て居ると云ふ評判實に厄介な人物なり、折から通り掛ッた小按摩が聲はりあげて小按摩「あんまァ上み下三百モーン男「オイ按摩さん小按摩「ハイ男「上下もんで何程だね小按摩「三錢で坐います男「なるほど上下もんで三錢なら上ばかり壹錢五厘だね小按摩「ハイ上ばかり揉のなら一錢五厘で坐います男「それぢやァ早い話しが天窓が五厘で肩が五厘それから兩方の腕が五厘と云ッたやうな勘定だね小按

摩「マア其様な割合でせう男「さうすると一本の手を揉のが二厘五毛よ當るね小按摩「ハイ男「その割合で小指を一本もんで貰う事が出來るかね小按摩「そんな譯よやア往きません男「さうか出來なきやア仕方がない又た此次に頼みませうよ小按摩「人を馬鹿よして居らア……按摩ア上み下三百モーン、流石の小按摩も呆れ返って其場を去れば、續いて來り新聞の賣子、チリン〳〵と鈴を鳴さながら賣子「エ、是ハ今日の朝日新聞やまと新聞よ都新聞、其外時事新報日本新聞……エヽ中にもやまと新聞は本社特別の大勉強、本紙の外よ錦繪表紙の小說附錄がついて代價ハ例もの通り男「オイ新聞屋さん其附錄だけはお負かね賣子「ヘー是は本社の大勉強で附錄だけはお負よなつて居ります男「それぢやア

其お負の附錄だけを只貰ッても宜かね賣子「そんな譯にやア行きません男「さうか行なけりやア止までの事サ賣子「何を云ッてるんだ頓痴機め、と新聞の賣子はグズ〳〵云ひながら去り行けり、其跡へ來りしは紙屑買なり屑屋「クズイ〳〵屑のお拂ひは座い男「オイ屑屋さん此節屑の相場ハ何程なものだね屑屋「ヘー屑が近頃は大層お安く成りまして先づ一貫目十二錢位なもの男「なるほど、然すると百目が一錢二厘十匁が一厘二毛一匁が一毛二絲ですね屑屋「マアさう云ッたやうな勘定で男「夫ぢやア其割で此の鼻ッ紙を一ッ買て貰へますかね屑屋「常談ばかり……只た夫ッぱかりの物が買ますものかね男「買へ無きやア止なさい屑屋「何を云ッてるんだ狸毛ッ唐めが、と是も亦た中ッ腹で其場を去れ

ば續いて來りしは豆腐屋なり豆腐屋「トーウィ豆腐ヤーイ、生アあげかンモドキ、豆フィ」男「豆腐屋さん澤山あるかね豆腐屋「ヘィ澤山澤山座います」男「澤山ありやァ豆腐の方まで行って賣りなさい

○第五　山の神の小言

女三人寄れば姦しいとは理屈詰の文字なれど、昔時から斯く云ひ傳ふる處によつて考ふれば昔しの女も隨分口の先の輕かッたものと見へる、併し昔しの女ハ三人寄て姦しいと云へば、一人や二人でハ左程ハ八ケ間しくは無かりしなるべし然るに當今は蚊鳴だとか怪化だとか云ふ舶來仕掛の機關で、總ての物事が進歩して早手廻しと簡便とか流行ゆゑ昔しは三人寄て一個の籠をヤットコサと擔ぎ歩行ま

も、今は一人にて二人乘の腕車を挽き、昔しハ三人寄て文珠の智慧を絞り出せしも、今は一人よりて三ツ〻と專賣の免許を受るなど、一から十まで昔しよりハ手輕よなりしゆゑにや、今の女は一人よりても中〻よく饒舌繰り昔しハ比較れば慥かに三人前の直打ある有樣とハ成れり、此處に引合に出す山の神も矢ッ張りその姦しい女の一人、然も井戸端怪議の議長兼鉄棒曳の怠長にて、即ち長屋中の鼻摘み、時ハ是れ午前十時頃例の井戸端怪議から我本陣へ誤退居と相成

り、先づ一寸氣休めよ一服と云ふ容体、太閤時代[illegible]も
鬱しき長火鉢の傍に立膝をして、上の方へ反[illegible]の
穴からッーッと二本の煙を出しながら山の神「オイ〳〵蜜
所へ猫が上ッたと見へて、彼處も此處も足痕だらけだよ、き
たないねへ……お清やチト氣をお附よ、本當にお前のやう
な凡突ァありやァしないッレ……水ッ鼻が垂るぢやァな
い、オ、きたない……アレ袖で撫る奴があるものかね……
又た障子を破くよ紙が無けりやァ無いッて何故さう云は
ないンだねへ……今朝さう云ッた處へ行て來たのかへ、大
力まだ行ないンだらう、今朝から今まで何をして居たの、又
た熊公と二人で日向ボッコでもして居たんだらう、見ッと
もない、乞食の昼休みぢやァあるまいし、十一にも十二にも

成てサ、間がな隙がなッッチンカンとして日向ボッコをし
て居る奴があるものか、見ッともない、お向ふの竹チャンな
んざァ感心な、お前よりか未だ歳が下だのよ、赤ちゃんの守
もしたり襁褓も洗ッたり、其上喂がありやァ窟の下も燃た
り又た使ひよも行たり、本當に能く働いて居るよ感心なも
んだお前も竹ちゃんの半分で宜のら、眞似をして浮[illegible]……
ソレ足元に茶碗があるよ……アヽ……ソラひッくり返し
た、ッかしい子だねへ、早く拭てお置よ……オイ〳〵灰
箸で突きやァ疊が破れるぢやァないか……アラマァ呆れ
たもんだ、疊へ吸込ましちゃァ行ないよ、早く雑巾を持てお
出テ……夫やァお前手拭ぢやァないか、手拭も雑巾も
一所にしちゃァ困るぢやないか……昨日布巾を見たら鼻

糞が附て居たが彼もお前だらう、本當よお前は味噌も糞も一所だからホト〳〵弱るよ……今にあつて雑巾を持て來たッて何の役よ立ものかね馬鹿……熊公、オイ熊公……熊公テーば、返事をおしよ返事を……お前何の獨よ口を持てるのだい、餘計な饒舌らないで宜、事ア喧嘩ベチヤクチヤと饒舌る癖よ、用向の事と云ッたら返事が一ッ滿足に出來ない、本當よ自家の子はナゼ此樣なに凡突だらう、私しやアお前達二人のお蔭で何の位壽命が縮まるか知れやアたない……お前ねへ井の上さん處へ行てお出、井上さん處へ行つてねへ、此間の洗濯代を戴かして下さいッて洗濯代を貰ッてお出で、ウカ〳〵して居ると落すよ、何を愚圖〳〵して居るんだねへシレッタイ……其手に持て居るなアなんだい、又

た鰹節の小刀を出したのぢやアない、危險ねへヒヨット怪我でもしたらどうする……コレお止テーば是れお止テーパ強情な子だねへ……マアア其樣なものア片附無くッても宜、から早く行てお出テーパ……オヽ五月蠅〳〵自家の子はど役よ立ない世話を燒せる奴アありやア仕ない……オイ草履ぢやア行ないよ未だ路が惡いから熊「何を云ッてるんだい糞たれ婆アめ、能く目を開て見ねへ徒蹉で歩行てる人せへあらア

第六　小理屈隱居

一人の老人が誰か相手の來よがしと只ポンヤリと去て居る處へ、愚弄半分よ飛込んで來たのヽ、ッヒ近所に住む我利助と云ふ男我利「今日は……老人「ウム誰かと思ッたら我利

公か、お前は心易いからマアどうでも宜やうなもの、人と云ふものはイクラ心易い中でも、先つ一通りの禮儀作法と云ふものは無けりやア成らぬ人にして禮無ければ禽獸よ近し、イヤ禽獸でも鳩には三枝の禮あり鴉は反哺の孝あり、羊は跪いて乳を呑と云ふ事があるぢや我利「ソロ〳〵初まりましたね……然から自己ア禮儀をしたぢやアありませんか老人「何が禮儀をするものか我利「陽隱居さんも餘ほどモウ耄碌しましたね今自己が今日ハッて挨拶をしたのが聞へませんでしたかね老人「夫は聞へた我利「聞へたら夫で宜いぢやアありませんか老人「何が宜いものか全体今日がどうしたと云ふのぢや我利「そんな分らぬへ事を云ッちやア困るぢやありませんか、今日はと云やア其跡はモウ云

はねへでも、其處はお前さんの方でグット呑込んで、ハヽア今日は好お天氣だと云ふのだなと、斯う推量して……老人「それは又た妙な答弁ぢやなるほど夫は先方が推量學問を卒業した人か何かで此方から半分云へば跡の半分ハちャンと推量して用の足る人は夫でも宜か知らんが、自己のやうな癖の悪い者ハ、一寸早い話しが御隱居さん其處にあるお茶碗をと云はれても、只お茶碗をと云ッたばかりでは、其茶碗を見せて呉と云ふのぢややら貸て呉と云ふのぢややら又た貸て呉と云ふのぢややら貸ッて行と云ふのぢややらサッパリ分らない、夫を同じ事で只突然よ今日はと云ッたばかりでは、今日ハ好お天氣と云ふのヂャやら悪いお天氣と云ふのヂャやら風が吹

と云ふのヂャやら、或ひハ寒いと云ふのヂャやら暖かいと云ふのヂャやら何が何ヂャやら少しも分らないぢや無いか　我利「またお株のコチクリですね　老人「エヽ何だッて今何とか云つたね　我利「ナニ此方の事で……　然が御隠居さん、隠居さんのやうよさう理屈を云ッた日にやァ些とも口が利れ無いぢやァありませんか　老人「是ハに怪からん事を云ふ人ぢや、元來理屈とは理が屈ると書のぢやが私は其様な理の屈ッた事ハ云はない只物の道理を云ッて聞せるのぢや　我利「道理だか草履だが知ら、ないが御隠居さんのやうに然ノべッよ理屈ナニ道理を云ッちやァ自己のやうな盲目ア困りまさァね　老人「又た妙な事を云ふ盲目とはノクラの事ぢやが、お前は立派な眼が二ッ明て居ながら夫でもメク

ラかね、爾ぢやあるまいお前の云ふのは大方文盲の間違ひぢやらう、文盲とは無學文盲と云ッて目があつても人並に文字の讀ない者を云ふのぢやが、お前も矢張りその文盲ぢやから分らないと云ふのぢやらう　我利「さう云はれちやア何よも口を利ことが出來ませんけれど、マァ〳〵何とでも判斷を附て置て下さい　老人「ソレ夫も又た間違ッて居るぢや、お前は先刻から頻に口がきけ無いと云ふ事を云ふが、お前は全体口で聞て耳で云ふのかねァハヽヽヽ　我利「それぢやァ何と云ッたら宜のでせう　老人「何と云ッたら宜とて口で云ふ事か出來無ければ、何とも云へないとか云ひやうに困るとか云へば宜のぢや　我利「なる程さう聞て見りやアさうでも有りませうけれども イヤよ屁痴六ケ敷のです

ねへ　老人「さう聞て見りやァ爾でもありませうけれども、其だ其意を得ない云ひやうぢや、全体ケレドモと云ふ詞は疑ひの詞ぢやから、未だお前は本當は曾得しないのぢやらう、夫よお前は今屁痴六ケ敷と云ふ事を云ッたが、屁痴と云ふ何の事ぢや　我利「何の事ぢやッてイヤよ屁痴六ケ敷から屁痴六ケ敷と云つたのでさァね　老人「夫がサ何の事ぢやヤヲ些とも分らないぢや無いか　我利「自己よも何の事だか分りません　老人「それでは困るぢやないか　我利「自己も困ッました

○第七　三百代言

表は一すして格子造り、右手に張た警第七号左りの方には小さき表札、文字は判然わからねど近眼の眞似をすれば、何か斯か牟田口勇藏の五字を見現はすべし、此家へ尋ねて來た一人の男「一すお頼み申します、牟田口さんと仰しやるのは此家樣で御座いますか　牟田口「ハイ牟田口は手前ですが貴郎へ何方のら……　男「エ、私しは天野ざんから聞て參りましたが、實は少し裁判の事でお頼み申したい事が御坐いますので　牟田口「さうですか何樣な事件か知り上せんがヤア此方へお上り成さい……コレお茶を一ッ……　男「モお構ひ下さいますな……エ、早速ながら實は斯云ふ譯なんで

して牟田口「ハ、ァどう云ふ事件ですかね」男「實は何んでして……ェ、昨年の八月より私しと外に二人の友達が連印して或人から金を十五圓借りましたのですテ牟田口「なるほど夫れ丶何か抵當があるのですか又は信用ですが」男「三人の連借になつて居りますから勿論無抵當でした」牟田口「如何樣わかりましたッコで利子は……」男「利子は一圓に付て五錢の割ですが手數料がテン引の二割と云ふのでして」牟田口「一圓に付て五錢と云ふと五両一分の利子だが夫より手數料がテン引の二割……へー夫ぢやァ正味イクラも手へ這入りませんね」男「左樣でゴザいます」牟田口「拾五圓の内で手數料を三圓出すと殘金が十二圓、夫を三人に分ると一人前が四圓ッ丶で、其四圓の内から又三月しばりの利子を七十五錢出すと

ッマリ五圓の証書面で實際は三圓廿五錢だけが先づ融通に遣へるやうな勘定でして」牟田口「なるほど隨分嚴しひ金ですね……へー夫から其金を借てどうしました」男「それが何でゴザいます昨年の十二月が期限でしたが、其とき三人ながら都合が惡かッたものですから、又た手數料と利子だけを拂ッて書替よして貰ひましたが今度また期限が來ましたから何の方て皆濟よ仕度と思ひますけれど、生憎仲間の中で一人丶遠方へ參ッて居て不在だし、又た一人はモウ永らく病氣で居りますので、滿足の者は私し只た一人ですが私し一人では迚も拾五圓と云ふ大金は返せませんから先方へ行て能く其譯を申して、どうかモウ今月一杯だけ待て貰ひ度いづれ其中には仲間の者も歸りませうからと、色

ろよ頼んでも何しても聞いれて呉ませんで、愈〻明日か明、後日の中に私しを相手取て裁判所へ願ひ出ると云って居りますが元〻三人が一緒よ借て証書よも三人の判が押てあるものを、只私し一人を相手取て願ひ出る事が出來るものでせうか　牟田口「ナニ夫は相手取る事は久張り三人を相手取て願うのだが、併し一人は不在で一人は病氣として見ると裁判所へ出るのハお前さん一人です、尤も連借と云ふものは例之ば三人の内で他の二人ハ旅行して不在であらうとも又は死亡しやうとも、其處に一人の連帯者が殘って居れば其一人が引受て返濟の義務を尽さ無ければ成ぬと云のが法律です　男「へー夫は困ましたねへ……ッコで私しが一人で引受たくも私しに引受て拂ふだけの金は

無いのですが、夫でも私しを相手取て願ひませうか　牟田口「それハ勿論返濟が出來る出來ないに拘はらず出訴の手續だけはするでせう　男「へー夫は困ましたねへ　牟田口「何がお前さん困事があるものか、若返濟の義務を尽す事が出來ければ、仕方が無から身代限サ　男「成ほど夫もさうですねへ、身代限りと云ッた處が碌な物もないから寧そさうきて仕舞た方が世話がなくて宜か知ら……成ほど是やアさう仕ませうよ……スルと何でせうか是から先方へ行て、金が出來ないから身代限りを取て呉ろと云ッたら、ハイ宜敷いと云ッて直に取に來ませうか　牟田口「ナニ其樣な手緩な譯にやアは行ません、先づ先方からお前さんを彼者として裁判所へ願ッて出ると、裁判所からお前さんに召喚狀がつくから、其と

きお前さんが出頭まして其理由を云ひさへすれば宜のです……然がやアお待なさいよ是奴ア此方の遣やう一ッで返金なくても宜やうに成るかも知れない男「へー此方の遣やう一ッで返金なくても宜やうに成りますかねへ……へーさうなるやア結構ですが夫やアどう云ふ事にしたら宜のでせうか牟田口「イヤ夫はお前さんの手際には迎も行ません、其處が餅は餅屋ですから私しよお任せ成さい、吃度さうしてお目に懸るから男「返金なくても宜やうに成りやア夫よ越た事はありませんから、是非それはお願ひ申し度ものでご座いますが……牟田口「宜しうご座いますお頼みなら一骨折て見ませう男「どうかお頼み申します牟田口「長まりました、夫では一ッお約定を

致しませうかね男「どうか願ひます牟田口「ヱヽト夫では先づ此樣な事よ書て置きませうかと蚯蚓の行列ながらもスラ〳〵と書た即席の約定書

約定書

一今般金樫慾兵衛より私しへ相係る貸金催促の件よ付き貴殿へ代人相願ひし然る上は如何樣の御取計ひ相成いとも私しよ異議は決して異儀ナす間敷尤も日當の儀は御制規の通り滞らず支弁致すべくし仍て後証の爲め約定書如レ件

小松田紋太郎

牟田口勇撮

牟田口「夫では只一ッ判を捺てお置なさい男「畏まりまし

た……其處で一寸伺ひますが此處は此……ユヽ然る上は如何樣の保取計ひ相成いとも書て呉座いますが……牟田口「ムヽ夫ですか……ユヽ夫は何ですよ、元々貸た金を返さ無いで濟せやうと云ふのですから、先づ其樣な事に書て置かないと、若し委敷く書て此事が政府へ知れると大變ですからねへ男「なるほど政府へ知れると大變でせうねへ牟田口「大變にも何にも若し知れた日にやアお前さん詐欺取則と云ふ法律に當られて、お前さんは勿論これを相談した私しまでが懲役よ遣られますよ男「へー懲役に遣られますと牟田口「懲役ですとも無論懲役です男「へー怖いものですねへ、夫ぢやア是へ判を捺しますから何分宜しくお頼を申します……ユヽト其處でまた日當が何とか云ふ事があるま

したが……牟田口「夫やアお前さん私しも是が營業だから只働らく譯よも行ませんが、併し夫やアマア後の話しサ此處よ斯書て置たからッて眞逆に百圓呉とは云ひませんやねアハヽヽヽ男「夫やアマアさうでせうけれども……牟田口「ナニ大丈夫ですよ

○第八　落語の獨稽古

落語家は世間のアラで飯を食ひ」と云へど、世間のアラで飯が食へるやうに成れば兎に角立派なものながら、其アラで飯を食ふまでが一通りや二ッ通りの辛苦ではあらず、ソコで此長屋に住で居る此男も落語家の前座と見へて、夜ゝ師匠の出る奇席へ行て客が來るまでの繋ぎを饒舌り、或ひゝ座浦團の持運びなどを働き、登間の中は自家よ居て一人で

壁に回ひ頭に出鱈目を饒舌って居る、エヘン扨早や替り合まして替りばへも致しませんが、只ふお客様のお揃ひよ成りますまで暫時お耳を拝借いたしまして、其中また跡連も追ふく繰込で参りますから跡連が参り次第私しは直様お暇を頂戴して楽屋へ飛込ことよ致しますゆゑ、何卒末を御遊楽とお聞きの程を偏に願ひます……今日は大分出來が宜ゞ……エヽ世の中の事は何でもお色氣が無ければ行ないと申しますが成程さうで座いませう、都ふ一と云ふ書物の中にも、人の心を分拆すれば色氣三分に慾七分、と書てある通り……待よお色氣が無ければ行ないと云って、色氣三分ぢやア餘まり色氣が少ない……エヽ色氣七分に慾三分……夫でも面白くないなア……エヽ人毎よ一ッの癖はあ

るものを我には許せ敗嶋の道でげえて、人に七癖己れに八癖有て七癖ドッコイ間違ッた……無くて七癖有て四十八癖だと申します、實よどうも大變な癖のあるものでげえて……實よどうも大變な癖のあるものでげして……ハテなら何とか云ふのだッけ……ハテな〳〵はでな姿にッヒ氣をとられか……エヽ面倒臭へ又〳〵新規巻直えだ……エヽお話えにも色〳〵座いますが、其中でもお差支へのないお話しい、泥坊に客商坊に鼻だと申します、成ほど是ハさうでげせう、泥坊の事をイシラ悪く云ッても自己は泥坊だが自己の事をナぜ悪く云ッたと云ふ人は座いません……旨い〳〵……又た客商坊の事を云ッてナぜ差支へが無いかと申しますと、客商坊の人ハ此寄席へ來る筈がないか

ら、是はイクラ悪く云ッても大丈夫でげす、夫から又た鶯の人も寄席へ來る氣遣ひはないから、是もイクラ悪く云ッても大丈夫だと申します……エヽト夫から何とか云ふのだッけ……又た忘れたぞ……エヽ扨早や替合まして申しあげます、エヽ毎度連中でお暇を致しますが、色は思案の外とやらで何樣な英雄の豪傑でも……英雄の豪傑はチトまずい……何樣な英雄のお方でも色よゝ迷はれると云ふ事で浮座いますから、我くが色よ迷ふのは尤も千万決して無理のない事でげす時に或大家の若旦那が餘り花魁に可愛がられ過たが爲に、とう〳〵阿親さんから勘當と云ふお炙をすへられて今は出入の親方の家の十階の身の上となつて居ります……十階の身の上と云ッてはあなた方よはお分

り成りますまいが、是は二階で厄介になつて居るから夫で居候の事を十階と云ふのぢやさうで浮坐います……旨い〳〵……然が世の中よ居候ほど氣の利ない者は浮座いません、居候しやう事なしの子煩惱、居候三杯目にはッット出し居候角な座敷を丸く掃き、若旦那もとう〳〵居候とまで成り下ッたから弱ました……エヽト夫から何とか云ふのだッけ……ムヽさう〳〵下から亭主が起すのだ亭主「若旦那はどうした女房「どうしたッてお前若旦那はまだ夜中の眠で寐テーるよ、本當に彼樣な厄介者を引摺こんでお前も宜お茶人ぢやアなれか馬鹿〳〵敗亭主「マアサ其樣なよ愚圖〳〵云ひなさんなテト事よ……モシ若旦那……若旦那と、箒の柄でトン〳〵と天井を突と若旦那もヤット眼が覺

たと見へて若且那「ア、、、、……オ、眠い〳〵春眠暁を覺へずか女房「アラ彼樣な事を云ッてるよ、尿瓶よ垢が附たッて亭主「若且那、二階へ尿瓶なんゞを持て行ちやァ困りますよ若且那「何を云ッて居るんだ當麻木め……處〻く啼鳥を聞テーんだ女房「アラ黙れたもんだ少〻亭主が聞なんて亭主「五月蠅なアマア、默止て居ねへな……若且那モウ十二時ですよ、モウ大概よして起たら宜でせう若且那「マア待たまへ急ては事を仕損じる、先づ懶鼻擤の裏表を能く檢査して……と頻に一人で饒舌ッて居ると、此處へ通り掛つた友達の凡太郎が凡太郎「相變らずッしやい、水戸錢は直に是へ頂戴凡太郎「人を馬鹿よした、是から僕が聞て遣から何か奢り給へ

○第九　出産の喜び

此家は腰辨當流の小官員、月給い幾か十七圓、十分の一を引去られても跡よまだ十五圓三十錢ある、驕者は際限の無い事なれど、倹約よして暮せばどうか斯か下女の一人位は使つて行るなり、殊よ夫婦暮しで厄介は何にもない、どうかして子供が一人欲いと思つて居る中、いつしか細君がポテレンとなつた、初産の事とて何角と案じられるけれども、併し夫婦の喜悦は一方ならず、産婆は何處が宜からう、餘り皺苦

茶の梅干婆アさんでも刻呑だし、と云って来た自分が子を産だ事もないやうな若下でも覚束ないと、彼方此方を聞合せて漸く産婆を取極、舊弊のやうだが先づ成の日を撰んで繃帯を締め、夫から六月七月と月日の經のは早いもので愈〻臨月、ソロ〳〵虫が被って来るまでよ切迫った、産婆は息急き喜びありヤと駈て来れば、お三どんはオー白湯オー白湯と竈の下へ燃つける、其中案じるよりハ有無もなく、安〻と生れた赤ん坊、赤ん坊ハ只〻〳〵壓氣に取られて驚いて居る様子、オヤ〳〵〳〵〳〵是は妙な處へ出て来た今まで此様な處へ出て来た事は無かったが、ハテな何ぞて此様な處へ出て来たらう、是は挺變だ實に不思議だ、待よ自己が彼處に例もの通りグッとして居ると、何だか知らないが後の方から〳〵押て来たから仕方なし前の方へ出やうと思つたら、ヲイと此様な處へ出て来た、ハテな何が押のだらう、ナゼ此様な處へ出て来たのだらう、何だかサッパリ理由が分らない、と初めて此婆婆へ出て来た赤ん坊は、只ポンヤリとして頻よ考へて居る、スルと産婆ハ襷がけよて産婆「サアお湯の准備が出来て居りますか、モウ此方へ持て来て下さいよ……ナニうめるのは私しが宜加減にうめますから外の桶へ水を一杯持て来て置て下さい……左様さ夫では少し塩が大き過ますねへ、最少し小形なのは座いすまいか……左様〳〵其の位で結構……オヤマア漏のですか、漏ッちやヲ仕方がありませんねへ、夫ぢやア矢張り大形ので間に合せて置きませう……オ、あぶな

い湯を持て轉んぢやァ行ませんよ、お産婦さんの枕元は靜に歩行て下さいよ、夫から赤チャンの着物を揃へて……さうですねへお襁褓に綿入二枚なら丁度宜しう浮座いませう　産婦「お婆アさん赤ん坊が些とも泣ませんねへ、初聲をあげない兒は啞だと云ひますが……　産婆「ナニ貴婦お氣遣ひ成さいますな大丈夫で浮座いますよ……何方でも一寸お湯呑へ冷水を一杯下さい、と産婆は冷水を口に含むや否な赤ん坊の顔を目掛てプーッと吹掛た、赤ん坊は妙な處へ出て來たと頻に考へて居る處へ、突然よプーッと水を吹掛られたから膽を潰して赤ん坊「オギャァ〳〵〳〵　産婆「ンレ浮覽なさい何が啞なものですか、サァお産婦さんはモウ餘計な浮心配を成さらないで、グッと一寸入あさいまし

すると、ポット血の道がおさまります赤ん坊「オギャァ〳〵〳〵　産婆「オ、〳〵宜お聲だ事、是はどうも貴郎は宜お土産を持て入らッしやいました、阿父さんが定めしお喜びで浮座いませう主人「お婆アさん男ですか　産婆　男よも何に也れ御覽なさい、立派な若且那で浮座いますよ主人「それは宜かッた、若し女でも生れやうものなら直よ捻り殺して遣らうと思ッて居た　産婆「オ、怖い事〳〵、サァ今度はお顔を洗ッて、夫からお手ゝも……女「オヤマァ宜、赤ちやんだ事、お湯が宜、心持だと見へて默止て　産婆「宜お心持で浮座いませうよ、此樣な不潔物が身躰に附て居たのですから、サァお湯を少た差て下さい……ソーッとハイ宜しい、サァ是でモウお着物を着ませう、と胸の邊りへ挙骨を二ッ拵へさして

桃色木綿の着物を着せた、赤ん坊は何となく身躰がすく〳〵するやうだが、併し餘ほど宜心持よ成たから益〻合点が行かない産婆「サア且那が一寸抱き初を成さるもので、ほど座います、と主人の前へ赤ん坊を出せば主人「へー私しが抱初をするのですか、種〻な法式のあつたものですねへ……なアるほど妙な面をして居る女「アラ彼樣な事を仰しやッて、其お口元からお鼻の鹽梅なんぞい、能く且那に似ていらッしやるぢやア浮座いませんか主人「ナニ自己やア此樣な醜男ぢやない女「アラ彼樣な事を仰しやッてオホ、、、、産婆「夫ぢやア私しはモウお暇を致しませう、何れ又た明日の二時頃に伺ひますからお湯を澤山沸して置て下さい、夫から此の葉書を一枚差あげて置きますから、是へお宅樣の番地

とお名前を書て郵便へお出し成さると、胞衣曾社から穢れ物を取りに參ります、尤もまだどうせ穢れ物が出ませうから、若し胞衣曾社から來たら最一度序に寄て呉れと云ッてお置なさる方が宜しうほど座います、マクリは精出しておあげ成さいましヨ、成たけ澤山マクリをあげるほど胎毒が取れますから、ハイ左樣なら皆〻「ほど苦勞樣、どうも有がたうほど座いました

第十　屁暮將棋

屁暮將棋王より飛車を大事がる、川柳子は能くも穿てり、此處よ五六人天窓を揃へてワイ〳〵騒いで居るのも、矢ッ張り其王より飛車を大事がるの屁ッ鋒連なり甲「イヨー又た初まつたな屁ッ鋒將棋が……乙「イヨー又たほど座つたな屁

ッ鋒の隊長が……、此方の連中は一切夢中、敵味方の當人同志よりは却つて見物人の方が氣を揉で居る樣子　甚「櫂さん其奴ア宜く無からうぜ　櫂「ナゼだつて……ソラ銀將で取れる……態ア見たか宜い跡が仕方が無からう　櫂「マア　サ默止てたまへ……細工は流〻仕あげを御覽じろか……先づ是を頂戴仕つつて　櫂「頂戴はり箱煙草盆か……其處でお手には……　平「お手には指が五本　櫂「串戲ぢやアない……ハヽア奴子さん飛車を持て座るな　甚「飛車もあり角行もあり金銀桂香お望を次第　櫂「ハテナ　平「ハテナ浴衣に束髪あたまか……サアお手は如何日が暮ますよ　甚「オイ手よは向があるのだ、銀將があるぢやアないか……モウ斯うなつちやア仕方がないから角行の横ッ腹から銀將を食はして桂馬で取て來る此方の飛車で……イヨー此奴ア面白い此先生ハ將棋を知ら無いんだ……是やアモウからきし形なしだ其樣な……アハヽヽ先樣も盲だ　櫂「東西〻〻とうざい基晴し……ソラ王手ですよお逃なさらない　平「ハイ王取桂助を來たな……斯う下ッて王を取ますよ　甚「オヤ此處に飛車が居た筈だが……　櫂「そんなに置てと……幾個も飛車があつて溜るもんか　平「然かれへオイ、君やア全体幾個飛車を持てる　櫂「僕か僕は二個持てる　平「怪しいぞ此野郎……自己の飛車を一ッ泥坊しやアがつたな　櫂「ナニ泥坊なんぞを爲るもんか、今此般よ落て居たから拾ッたんだ　平「常談ぢやアない何も自己やア變だと思つた……サア一ッ返せよ……エヽト何處に居たんだらう慥か此邊だッけ

「オイ〳〵其様な處へ勝手に飛車を置れちゃァ困るぢゃないか」「困るからッて仕方がない、元〳〵此處に居たんだもの」「虚言をつけ夫ぢゃァ直ぐ行かぬ銀將か何方か知ら取られるぢゃァ無いか」「然ッて取られるやうな手よ成てるのだから仕方がない」「二人い頻に飛車の置場を爭つて居る、此處へ仲裁よ這入たのが傍より見て居た銀公銀「そんな面倒臭へ事を云ふやうなら、二人とも飛車を使はないで差せば宜ぢやァないか、サァ二人とも自己に飛車を寄越せ自己が預ッて居て遣らう、とは隨分妙な仲裁なり、スルとム、夫が宜からう、と二人とも銀公に飛車を預けて再び又た差はじめた」「サァ來い」「サァ來い」「サァ來い」「サァ來い」「サァ來い……サァ來いと」「オイ〳〵手は一手替りだよ、其手は喧嘩の燒

蛤だ……此駒は引込まして頂戴」「知つてやァがッたな此畜生」「知つて居なくッてよ眼が二ッあるもの」「二ッで仕合せよ三ッあつたら化物だ」「四ッあつたら本所だらう……ソラ金將を取るぞ……此弱虫めが逃たな……夫ぢやァ王手と」「王手嬉しや別れが愛ひと……先づ斯樣な事にでもして置のだ」「王將も下さらないとか……ハテナどうして九両三分二朱……エ、仕方がない先づ此邊からソクソクと遣て行か」「銀是やァ駄目の皮の犢鼻褌、ナゼ其橋な馬鹿な事をするんだ……アレ……アレ彼奴な……此奴ァ丸で將棋を知らないのだ」「お靜に頼むよ是でも大橋宗桂の直傳だから可笑しいや」「大橋宗桂の直傳か……ソラ是が所澤藤吉の極意だ……サァ大橋先生はどう成さる」「さうお

出なさりやア一寸かう仕つる平「一寸かう仕つったら何なさる櫂「然らば斯う仕つる平「敵よ後ろを見せるとは卑怯千万……ドッコイショと金將を頂戴して王手か櫂「オオ〳〵此角行は全体何處から飛んで來たんだ平「何處からだッてヤヤンと筋目正しく櫂「常談ぢやアない此處に居たんぢやないか、痴氣筋ハ眞ッ平だぜ平「アハ、ハ、ハ、お目よ留れば逆戻り櫂「この横着野郎が……サア今取た金將を返せ〳〵平「化痴な奴だなア、金將一挺位ハどうだッて宜ぢやないか……ソラ何處へでも勝手な處へ置とけべ櫂「ソコでお手には……平「オイ自己の番だよ櫂「自己の番なら早く仕ねへな平「早く〳〵と急立られか……サア坐らッしやい櫂「なんだ其樣な處へ桂馬を打てハヽア此奴を取て犢鼻褌と云ふ

思し召か……さう冒くは問屋で卸さないぞ……ソラ斯う遣て置きやア藥鑵の湯沸で章魚だらう平「なるほど先樣にも荒神樣が附てるな、夫ぢやア斯うしたら何なさる櫂「イヨ是奴ア有がてへ下さる物は裏もお小初平「ム、其處に其樣なものが居やアがッたか、其奴ア大失敗……マア夫も宜ッ百足が轉んだんだ甚「全体君の手には何があるのだ平「手にか、よは金將銀將桂香よ飛車角行何でもお好み次第甚「桂がありやア先づ王手と引掛て見たら宜からう平「桂と行やア横へ逃らア甚「横へ逃たら歩の頭から金將サ平「上へ逃ア甚「上へあがるやア尻から銀將サ平「歩を取て來る甚「歩を取て來りやア此方の金將が上ッて行く……どうだ夫でギヤアンだろ平「處がお手よは只た歩が二枚なんだ

○第十一　細君の長話

此處ハ婦人の一團結、彼の棟咏噂の良否から猫の尻尾の長短まで細大漏さず無間斷幕無しよべチャンチャと喋舌くる仲間、尤も娘は娘細君、細君自から談話の種に差別あり、俳優の蔭最負も市己よ榮へ、流行物の彼是も大概は云ひ尽せり、時よ横手の路次口から娘をつれて出て來た婦人、手に大きな手拭包を持たるは、云はずと知れた七ッ道具シャボン垢摩ぬか袋さては又た厚朴炭輕石なんぞの類ひなるべし、夫を見るより此方に居るお清と云へる娘が清「オヤ喜ちやん何方へお湯ですか、母、親は之よ答へて母「ハイ一寸……是で濟めば極簡便な驛な掛に、又た一方の細君が細君「貴嬢ハ何方のお湯へ入らッしやいますか、と質問が初まれり母「先月までは向ふ横町へ參りましたが、彼處は熱くて此子が嫌だと云ひますから、少し遠ふ座いますが今月からは彼方の塩湯へ參ります」細君「さうで座いますか、本當よ向ふ横町のお湯ば熱くて仕方がありませんよ、夫よ三助が無精でしてねへ妾しも來月から塩湯の方よ致しませうよ……オヤ喜ちやんの……一寸横向て覽なさいな、大層恰好よく奇麗よ出來ましたねへ、矢張いつもの結髪さんで座いますか喜代「イヽエ阿母さ

んが細君「さうですか阿母さんが……どうも御器用な事ね

母「ナニね貴嬢、餘り宜くもありませんけれど、今日も髪結

さんが來て折角奇麗に結て呉れたものを、ヤレ根が上ッた

の下ッたの髪がどうだのと、愚圖〳〵云ひながらとう〳〵

捨て損したものですから、今小言を云ひ〳〵ヤット纏らて

遣りましたのサ、自分のすべき藝事と云ッたら何一ッとして

出來ない癖に、只髪がどうたの着物が何たのと、贅澤な事

ばかり覺へるにハ困ります細君「此處にも耳の痛い人が一

人居りますよ、是は我娘のお米の事なり、お米ハ又た我身の

上の事を饒舌られるかと思へば、急よ母、親の袖を引て來「阿

母さんが又た初まつたお止し成さいよ、母親ハ少しも頓着

せず細君「それでも喜ちやんはお温柔いから宜うご座いま

すが、妾し共のお米なんゞは本當に仕方がご座いません、お

轉婆で口が達者でしてねへ貴嬢、夫ですから妾しが始終さ

う云ッて聞せるのですよ、お向ふの福ちやんでもお隣りの

美ちやんでも皆なお前よりか年下だのに、何でも能くお出

來なさるし、阿母さんの仰しやる事もハイ〳〵と云ッて能く

お聞なさる然だからお前も少ち氣をつけて、福ちやんや

美ちやんの眞似を、只の一日でも宜から仕てご覽と云ひま

すと、阿母さんが又たお株を云ッて居る、其樣なに小言を云

ふならナゼ此樣なに氣の利ない者を生だのです、此樣な氣

の利ない者を生だのが惡いなんゞと、其樣な口の減ない事

を云ふのですよ、憎らゝいちやアご座いませんか母「ナニ何

方樣のも同じ事でご座いますよ、此處へまた一人の内儀さ

んが口を出して内儀デスがねお内儀さん、何の角のと云ッても女の子は樂ですが、男の子となると隨分骨が折れますよ、幼い少時ハ幼少ときで相應に世話を燒せるし、成長なれば成長なるて云ふ事ハ聞ず、本當に時よよると腹が立て腹が立て撲り飛ばして遣らうか知らと思ふ事がありますよ、此間も逆上の精か頭痛がして〳〵堪らないから、其處へ寢轉んで居ると彼の總領の奴子が來て、阿母さん何かしたの、頭痛がするなら氷か何かで少ち冷すと宜よ、夫とも按摩さんでも頼んで來てあげやうかと云ひますから、彼の子がヤァ平時にない能く氣がついた、ナニ其樣なよ騷ぐほどの事でもないが、若し彼方の方へ序があつたら可市さんに來て呉るやうに云つてお呉と云ふと、アイよと云つて自宅を出た

切り、二時間經ても三時間經ても、當人も歸ッて來なけりや按摩さんも來ず、其中日の暮よなつてボンヤリ歸ッて來たから、お前あの可市さんの處へ行てお呉かへ、まだ來て呉れないが留守でゃも有ッたのかへと云ふと、ナント呆れ返るぢやァありませんか急に思ひ出したやうよムヽさう〳〵だッて細君忘れて仕舞たのです內儀途中から友達と何處へ行て、スッカリ忘れて仕舞たのですサ、野ン氣ぢやァありませんか、談話益々熟し、羅に湯に行かんとせる者もッヒ此處ハ引留られ、自らも浮々その話ハよ釣込まれて行もせず歸りもせず、時に近所の男の子十一二を頭として三四人此中に此家の子供も一人交ッて居る、何やらん各自に袂の底へ入れて、大事さうよ手で確りと握つて歸ッて來た母親

幸坊なんだへ其袂へ入れて居るのは……又た石ぢやないかへ幸「イヽエ石ぢやないよ蛙だよ母親「嫌な子だねへ蛙なんぞを何所で捕て來たの、其樣なものを袂へ入れちやァ行けませんよ、早く打棄ッてお仕舞ひ、と云へば傍に居る菊次郎と云ふ惡戲子供が菊「おばさん是やァね、蛙だッて雨蛙や碧蛙ぢやァないよ、赤蛙だよ、燒て食ると旨いよ、一疋見せやうか、と袂より中でも大きさうな奴を一疋取り出せば、幸吉の母親は顏をしかめて母親「オヽ、嫌だ〳〵氣味の惡い……菊ちやん早く打棄ッてお仕舞なさいよ、何と云ッても子供は平氣、嫌がれば嫌がるほど猶ほ面白がッて、蟾て其蛙の足の指からクル〳〵と皮を剝だ菊「おばさん是れを伊覽よ、と赤肌より引ン剝た蛙を其處へ投り出せば、蛙は其儘ピョコ〳〵スルと其所に居合せた四五人の婦人連は皆な身震ひをして、オヽ嫌だ〳〵と立退く、折から彼の湯より行かけた婦人の、亭主、は遠くの方から聲をかけて亭主「オヽ早く歸ら無くちや困るよ、女房は初めて氣がつき女房「まだ是から行のですよ、

第十二　鍼醫者

長屋の中では一寸目より附く玄關造り、ペンキ塗の門より當世流行の瀬戸物表札、鍼唐棒庵と楷書で書て右の柱より打つけ、其下には同愛社施療と隷書で認めた木札あり、左には鍼唐棒庵診察所と筆太よ書た看板が掛、其看板の下へ種痘の日割を半紙へ書て張つけ、玄關の正面には「毎日診察午前十一時限り但し急病へ此限に非ず」と認めあり、其体裁は宛然

ら名醫のやうなれど、實は法律外に人を殺すのが大の得意、近所の者とても此醫者よ掛るよりは、先づ妙振出しでも飲んで居た方が無難で宜からうと云ふ位、然れど按摩といへ違ひ、いくら流行ないからと云って、眞逆に大道を、病人の診察ー と吐鳴て歩行わけよも行ず、と云って何か金の這入道が無ければ鼻の下が乾あがる處から、或る高利貸を抱込で其下働らきをして居る、一日此家へ飛込で來たのは日頃懇意にする弁助と云ふ瓢近者弁助「先生今日い……棒庵「イヨ是は……辨助「早速ですがねへ先生、今日は先生よ少去お願ひ申し度事があつて伺ひました棒庵「ム、なるほど、ハ、ア……道理で今日は血色が悪いと思つた、大方例のインフルだら う、風邪は万病の基と云ふが舶來の風邪は別して用心しな

いと往ない、どれ〳〵脈を一ッ……辨助「申談云ッぢやア行ませんぜ、自己やァ其樣な舶來の風の神なんぢに舞込まれるやうな弱い尻はあまりません棒庵「デモ大層血色が悪いぢやないか辨助「なるほど血色も悪いでせうサ、是よは大きに所謂因縁のある事でして、實は今日伺ッたのも其血色を承はり度が爲で……棒庵「血色を承はり度とは辨助「是やァ話せない、結局と云ふ所を一寸洒落て見たのでさァね、棒庵「是は請取よくひ洒落だ、全体洒落と云ふものは其樣なチョロッカなものでは無い、洒落の中よも語路、半語路、引出し語路、なぞ〳〵云ふ區別があつて……辨助「又た初まりましたね棒庵「ナニ又初つたぢやァない是も後學の爲だァ聞て置くが宜い、近頃或人の洒落よ「湯嗚の納涼の夕方にサ辨助「夫

やァ何の事です　棒庵「了解まい、是が「一羽の雀の云ふ事にやと云ふ語路サ　辨助「イヤに六ケ敷のですねへ　棒庵「本當よ行と皆な斯う云ふ風に六ケ敷、夫から「茶あらば鮒を參らせんサ　辨助「夫は……　棒庵「是が、サアラば鈴を參らせんと云ふ半語路、夫から古文眞寶に子分辛抱、暗に鉄砲に政府に憲法　辨助「了解ました〳〵　洒落の稽古は先づ後廻しとして、實は今日伺ッたのは外の事ぢやァありませんが、據ろ無い處から少し頼まれたんですけれど、何でせうかンの十日か廿日の間ですが貳百圓ばかり御用達て下さる譯にハ參りますまいか　棒庵「夫れやァ先方次第でどうよか成らない事もあるまいが、併し君の周旋は實に劍呑だ、又た日外のやうよ壯士なんぐよ押込れちやァ閉口するからねへ、是れ見なさい彼

の時よ撲られた癇が未だに此通りだ　辨助「彼りやァ近頃の大不出來、彼奴ァ自己も見損ひでしたが、今度の口はモウ大丈夫です　棒庵「全く大丈夫なら金主元へ話しも仕て見やうが然して借主は何と云ふ人で何か抵當品があるのかね　辨助「借主も極確な人で抵當品も頗る上等です　棒庵「さう云ふ事なら話しも直に纏まるだらう　辨助「さうですか夫やァ有難い、實ァ何ですて先生も多分御存じでせうが、借主は彼のソレ伊勢孫の若大將です　棒庵「なるほど伊勢孫の若大將ならまだお目に掛ッた事は無いが話しには聞た事がある、然して抵當は……　辨助「扨て其處ですて、夫よ就ちやァ少しお話し申さ無けりやァ、分りませんが、實ァ先生から云ふ譯なんで大きな聲ぢやァ云はれませんが、實ァね先生彼の若大

將が骨が無けりやア一緒よ成り度と云ふ位大デレ附の藝者だか女郎だかあるのです、處で其女が今度或る外の客よ落籍されると云ふんで、若大將も大閉口大弱りと云ふ一件です、昨日自己が久し振で行た處が、若大將の云ふにやア、ム、辨公宜、處へ來て呉れた、實ア是〳〵斯云ふ譯で差詰め二百圓ばかり入用なんだが、何處で一ッ周旋して呉まいか、若し其金が出來ないと僕は生ては居られ無いと云ふんで大變な騒ぎやアありませんか、處で自己やア斯云ふ俠氣な者ですから棒庵「何が俠氣なものかね お前が……辨助「ム、、暫く……夫から自己の云ふにやア、短氣は損氣たッた二百圓や三百圓の事で大切な生命を棒に振なんて、其樣な氣の少さい野暮な事を仰しやいますな、自己も男ですさう打明てお頼みなら明日とも云ふず只た今必らず調達して進ぜませう、ア、添ないぢや辨助どの、ぢ心配なさりますな、とは云ふものゝ二百圓と云ふ大金が、エ、どれ一走り行て參りませう、音羽屋ー、チョン〳〵〳〵と來て、今度が同じく返し戯唐棒庵奥座敷の場と來たんでせう 棒庵「何を云ふのだか些とも分らない 辨助「分らないとは夫やア先生の方が分らないんだ、兎に角右の次第ですから是非二百圓だけか借申し度んで 棒庵「然して抵當は……辨助「ヘー其事もモウ確乎と相談して來たんです、先生もぢ存じの通り彼の大且那も近頃大病で、モウ今日か明日かと云ふ處でせう 棒庵「何だか其樣な話ぢらしいね 辨助「其處ですて彼の大且那さへ死去て仕舞やア、跡の財産は殘らず若大將の物よな

るのですから証書へも矢張り此抵當親父一人として、文面の中へも親孫右衛門死去致しゝわゝ直樣御返金とか何と書て置やァ、是ほど慥な事ァ無いぢやありませんか捧庵「人を馬鹿にした其樣な不安心な抵當では眞平だね辨助「ナゼ不安心ですゝ棒庵「ナゼだッて若し孫右衛門さんが死なかつたら何する辨助「ナニ大丈夫岐度死にますよ、モウ此五六日と云ふものァ碌〳〵飯も食ないで、牛乳をヤット五夕ッゝ、呑で居る位ですもの棒庵「牛乳が五勺ッゝ、呑りやァ何が死ぬものか、裏の長公なんざァ去年成田へ行て廿一日の間斷食をしたさうだが、夫でも彼の通りピンシャンして居るぢやァないか辨助「さうですねへ、さう云はれて見りやァ何とも知れないが、夫ぢやァ是から先方へ行て能く話しをして、

明日から先生に療治を願ふ事に致しませうが棒庵「そりやァどう云ふ譯で辨助「ナニさうそりやァ岐度死ぬでせう

○第十三　夫婦喧嘩

男女同權とは舶來の新文句男尊女卑とは扎子樣の置土産、その中間を取て男尊女尊と勝手に定め、夫婦別なく互ひに角突合の金平糖然たるは、是ぞ東京の裏店に住む宿六山の神の社會である、時に懷手をして盆槍と歸ッて來た宿六山の神は夫と見るより例の高調子で山の神「オイ〳〵何を

日中そんなにノッ〳〵して居るんだね……外聞の悪い、と突然の剣突よ宿六も勃然としたが、此阿魔め又たお株を初めやアがつたと云はない計りの澁ッ面で、只拳骨で鼻汁を摩ッて默止て居る、スルと此方は益々鼻息あらく山の神「本當にお前のやうな凡突アありやア仕ない、毎日〳〵其樣な盈か正月のやうよノラクラしてどうするのだへ、自家の者ア皆な腮が干上らうぢや無いか……お前も餘ほど誤笑樂だねへ……本當に愛想も顧想も尽はでらア、と斯く無間斷のべたらに吐鳴り散して猶は言ひ足ぬ容子、宿六も最早や默し難しと堪忍袋の口を解き宿六「生意氣な事を云やアがるな畜生め、自己がいつ其樣なよノサクサして遊んで居た、宜加減に戯言を吐やアがれ……屁固たれ阿魔め山の神「

ヘンロほど調法なものアないねへ、本當におちやん茶羅かしいや……盗人たけ〳〵敗たア、宜く云ッたもんだ宿六「ナニー何だと自己が何時泥坊をした山の神「ソレ夫だもの夫だからお前は餘ほど何かして居るテーんだ、チト井戸端へでも行て面でも洗ッてお出で、誰もお前が泥坊をしたヽアヽ云やアしないやね、餘り圖〳〵敗から夫で盗人たけ〳〵敗と云ふのサ宿六「何が圖〳〵敗山の神「なよが圖〳〵敗ッて能くマア考へて浮覗よ、其通り今だッてノサクサ遊んで居るぢやアないか、其樣なに遊んで居ながら遊んで居ないと云ふから圖〳〵敗と云のだね……頓痴奇め宿六「ナニト此怒多福め自己の事を頓痴奇と云やアがッたな山の神「アヽ云ッたよ、頓痴奇だから頓痴奇と云ッたんだ、何も不思議な事アな

いぢやないか……態ア見たが宜このゲシ〳〵野郎め、と素より猿と犬との夫婦中、元を糺せば根も葉もない事なれど其處が世よ云ふ賣言葉よ買言葉、互ひに負じ劣らじと口角泡を吹けども饒舌る方では山の神の方が餘ほど上手、宿六もモウ是まで、と突然拳骨を振上げ「此ン畜生」と云ひさま山の神の天窓へポカリッと一ッ參ッた、是が普通の女なら忽ち其處へ平突張、苦思〳〵泣出す處なれど、流石は山の神だけあつて中〳〵泣のない、泣か無い處か益〳〵頬邊を脹らかし眼玉を釣あげて山の神「此野郎人を打ちやアがッたな……サア どうでもちろ打なら打て見ろ殺すなら殺せ、と敢闘らく飛付たり、宿六も浮〳〵して居れば反對に捻伏られるやも計り難きより行成り野の髪を取捕まへて其處へ引倒さん

とすれば、山の神も一生懸命になつて向ふ臑へ喰ひ付き或ひは面の皮を引掻むしる、其物音ドタンバタンとして騒ぐ敷は恰も嵐末の煤掃の如く、棚の上から茶碗皿鉢の轉げ落てガランピシャンたるは宛然ら岐阜の大地震に似たり、夫婦喧嘩は犬も喰ハぬと云へど、眞逆に此騒ぎを聞ては義理にも知らん顔ハして居られず、其處へ飛込で來れのが隣長屋の吃平なり吃平「マ、〻、待ねへ……マ、〻、〻、待ねへてッたらマ、待ねへ……ッ、〻、其樣あよ……コ、これさア、危險へ……アハ危險へからヨ、〻、止ねへ……ドうした譯かシ、〻、知らないが……ッ、〻、其樣なよッ、掴み合ナ、ないでもシ、口でイ、云やア分るぢやナ、ないか宿六「吃さんマア打擲ッて留て……ナーニ此婦貞腐

れ阿魔めが餘まり人を馬鹿よしやァがるから山の神「サァ殺すなら殺せ……サァ殺して見ろ……手前はなぜと云ふと自己は亭主だのと主人だのと勝手な戯言を吐やァがッて此馬鹿野郎め亭主なら亭主のやうに……吃平「モ、、もう分ッてィ、居よ宿六「亭主だから亭主と云ふんだ山の神「亭主なら亭主のやうに何故しない吃平「モ、もう夫で宜、やッ、、、夫で宜くワ、分ッて居る、と頻りに仲裁をして居る處へ慌忙しく歸ッて來た一人の子供子供「爺やもう喧嘩は濟だのかい……酷らねへなァもう一遍取組合ッて見せりやァ宜のに

○第十四　老人の實地話

今日ハ宜お天氣で……と聲を掛ッ、入て來りしはッヒ近

所に住む孫兵衛と云ふ隱居親父、此方の主人は清兵衛として右の孫兵衛隱居と殆んど同年輩、同じ長屋に住居はして居れど先づ小遣錢と米代には差支へなき身上、春の日永の徒然に相手はしやと思ふ折からなれば清兵衛「イヤ是は……實に今日ハ好お天氣です孫兵衛「是が本當の春の陽氣でしやうよ熱くもなし、寒くもなし斯云ふ日に何處へ氣保養に出掛たら宜でせうねへ清兵衛「左樣さもう同樣に年を取ちやァ長旅も出來ませんが一寸一晩泊りで江の島から鎌倉邊りへでも出掛て見たう御坐いますねへ孫兵衛「至極結構ですねへ、併しお宅なんざァ幾許か此庭がかあり成さるのでお保養にも成りませうが、私しの家なんざと云ッたらお存じの通り雪隱と蛞所が並んで居るやうな酷で、植木鉢

を一ッ置く處が無いものですから、斯云ふ日よは實よ自家よ居るのが嫌になります　清兵衛「ナニ私しの家とても是は庭があると云へば云ふやうなもの、實ァ彼の丸彦さんの土藏が彼處にあるものですから、朝から晩まで碌ろくよ日の目を見ないのには困ります、孫兵衛は少し聲を低くして孫兵衛「ム、丸彦さんと云へば彼家も此節ァ大變に衰微たと云ふ話しだが本當ですかねへ　清兵衛「衰微たよも何にも大衰微です　孫兵衛「へー全くですかねへ、彼程の身上が何して其樣なに急よ……　清兵衛「ナニ元いと云やァ矢張り蜘蛛町ですよ、空米に手を出し初めたら最期商人はモウ駄目ですからねへ儲かれば儲かるでモウ一度と思ひ失敗れば失敗るで其奴を取返し度なるから、何方へどう轉んでも駄目

なものですよ　孫兵衛「その癖前の彦右衛門さんは彼の通りの堅人でしたがねへ　清兵衛「堅人にも何にも、私し共は若い時からの惡意でしたが、彼の人が去年春死去なる迄と云ふものは自家の者は勿論奉公人よ至るまで、毎月三十日に盛蕎麥を一ッづゝ食せるのが關の山で、平常と云ッたら燒芋を一ッでも無益よは買ませんでしたねへ、勿論その位だからこそ一代の中に彼の身代になつたのでせうが、夫はどうも感心な人でした、第一何處へ行にしても腕車に一ッ乘うぢやなしサ　孫兵衛「何だか其樣な話しでしたねへ　清兵衛「夫だからお前さん、途中で何樣なよ腹が減うとも團子を一本食はふぢやなし、只く金を溜る一方……どうも出來ない樣ですねへ　孫兵衛「イヤ私し共の親類にもさう云ふ人があり

ますが、金を貯蓄やうと云ふ人は又た別ですねへ、迚も御同様よ眞似をしやうと云ッて出來る藝ではありません　清兵衛「眞似では所詮出來ません　是ばかりハ其人の生れ付です　孫兵衛「然がそんな堅い人の子よ相場なんぞへ手を出す人が出來るたァ是も亦た奇態ですねへ、賣家を唐様で書く三代目とは宜く云ッたもので是非さう云ふ廻り合せよ行くものですか知ら　清兵衛「ナニ今の若大將は全体その方が好きと見て、最六七年も前の事でしたが、彦右衛門さんに極内で一寸手を出と運よく四五十圓儲かッたんですよ　孫兵衛「へー旨く遣ましたれへ　清兵衛「スルとお前さん大將は大天狗で、彦右衛門さんよ其事を話すと彦右衛門さんは例の堅人だから怒ッたの怒らないのッて夫やァどうも大變な騒ぎ

サ　孫兵衛「ハテね　清兵衛「その時に私しやァさう思ひましたねへ、大概な者なら縱ひ内證で手を出したよしろ、儲かって見りやァ餘り悪い心持はしないから一旦小言ハ云ふやうなものゝ只此後よ此様な事をしてハ成らぬと其場は先づ夫なりけりで濟せるのが世間並だが、其時にお前さん斯い小言サ……成ほど僅か十圓か十五圓の資本で、六十の七十のと云ふ大金が儲かれば大層もない手柄の様だが、若し是が罷り間違ッて反對よ先方へ取られたら何する、夫はマァ運よく先方へ取られ無かつたから宜としても、全体そんな泥坊をしたやうな金が身に附かう筈もなし、好んば身に附たにした處が一度そんな味を覺へると、又候今度も遣る氣になる遣る氣よなつて遣て見ると、今度は丸ッ切とられ

て仕舞ふ、さうなると今度ハ〳〵で、揚句の果にはとう〳〵身代までチコツゲ飾ッて仕舞のは知れ切た事だ、其様な延喜の悪い金は縦ひ一銭たりとも自家へ入れる事ハならないから早く元の處へ持て行て返却て來いと、斯云ふヤア小言でしたがどうしても本當の商法人は眼の着け處が違ッて居ますねへ孫兵衛「なるほど爾う聞て見りやア夫よ違ひない

○第十五　賣卜者

庇から二三尺ニュッと出した一本の旗標、天竺木綿の一巾で恰もお三どんの湯文字然たり、五六年前までは白かつたか知らねど今は鼠色も通り越て真黒と成て居る、上に顯はした算木の形ち下に書た人相吉凶の文字、當るも八卦當らぬも八卦と云へど、先づ當らぬ八卦と云ふ案人鑑定の方が能く當ッて居るらしい、けれども鰯の頭も信心でポッ〳〵迷ッて來る人のあるのも亦た不思議、ハイ冷免なさいと這入れば客坐敷も臺所も合併兼用の六疊敷、正面ハ一脚の小机を扣へて金巾の札旗を掛け、其上ハ算木筮竹或ひは古びた周易の書を五六冊積み重ね、右の手ハ天眼鏡を執り左の手に胡麻塩の口髯を捻繰りながら、一人の婦人を相手ハ尤もらしく饒舌ッて居るのが此家の主人公　主人「ム、なるほど此

易で見ると「瓶鉄火烈」とあるから陰陽ともに能く備具って居て、一寸考へると何事も無事に納ッて行さうだが、過たるは猶は及ばざるが如しで、物事も餘り充分過ると却ッて禍ひが起る、早く云ッて見ると亭主が鉄瓶でお前さんが烈火だ、烈火と云ふ〳〵火の燠んなる貌、火が燠んで無ければ鉄瓶の湯も沸ない道理だが、併し急ては事を仕損じると云ッて、自然に任せて置ば元〳〵鉄瓶の中にあるの〳〵水だから段〳〵と湯になつて來るに近ひない、夫を早く湯にしやう早く煮立やうと思ッて、堅炭やら土竈やら消炭やら或ひは石油の箱の打毀れなどを燃して、是でも沸ないか未だ煮立ないかとドシ〳〵火を燠んするから、其處で鉄瓶の尻の穴が明たり或ひは口から湯を吹き出して灰神樂の騒動が初は

るやうなもので、全体が前さんの氣性が烈しくて何事も他人には負まい〳〵と思ッて居るのは至極宜事だ、先んずれば人を制し後れる時は人に制せらると云ッて、負ない氣性は至極宜が、併し其負まいとする中よも餘ほど無理がある から夫が爲め兎角に家が治まらない、古人の歌にも「負て退く人を弱しと思ふなよ智恵の力の強きゆゑなり」と云通り、時に依ては理があつても負て居なけりや成らない事もある、殊に男が陽にして女は陰だから陰が陽に勝事は出來ない、然から亭主は外を治め女房は内を司どる　婦人「一寸先生待て下さい妾しはまだ亭主はまだ坐いませんので……ナニ亭主はまだ無いとか……イヤ亭主は無いにした處が親子の間柄でも同し事　婦人「イエ其両親もないのでは

坐います易者「イヤさう皮肉よ出られては話しが仕悪いが、好んば兄弟の中でも……」婦人「イヱ其兄弟も沙坐いません」で易者「是はしたりヤア默止て聞て居なさい……縱ひ両親兄弟は無くとも物の道理を云へバ其樣なものだ……ヱヽさうぢやないか……然して子供いあるかね」婦人「亭主が無い位ですから子供も沙坐いません」易者「なるほど一人で子供が出來やう筈もないが併し今に沙亭主も出來れば子供も出來る然もお前さんの一生の中には子供が三人あると云ふ事がチヤンと相に現われて居る、其處で此子供が續て一人でも出來ると、子い三界の首枷と云ッて子供が可愛いが爲に夫婦別れなんぢと、其樣な我儘な事が出來なくなる……ヱヽト夫から去年中なにかお前さんの身に取て極凶

い火難とか盗難とか乃至また病煩ひとか云ふやうな事い無かつたかね」婦人「あゝました、火難も盗難も病氣も皆なあります去た易者「ムヽさうだらう其火事に逢たとき立退場所が悪かつたと見へる」婦人「イヱ火難と云ッても火事は逢たのでは沙座いません」易者「ハテな火事でハ無い」婦人「たしか去年の十一月頃で沙坐いました、妾しが柳原から一圓五十五錢で羽織を一枚買て來ました處、あんまり皺苦茶になつて居ますから火熨斗をかけて居ると、生憎粉炭でしたものだから突然パヤ〳〵刎て凡そ十五六ヶ所も燒ッ焦しが出て來ました」易者「なるほど夫い飛だ事で」婦人「それから彼は何時でしたッけ力よ行水を遣ッたとき慌よ蚤所へ置た、襁袋が一ッ紛失ッて今に至るまでどうあても知れませんか

ら、大方泥坊にでも取られたのでせう　易者「夫ハマ
ア大難が小難で濟で宜かつたが、然して病氣と云ふのは大
病でしたかね　婦人「ナニ夫もホンの風引位な事でしたか
ら妙振出を一服飲だら直に平癒ました　易者「イヤ夫も大難
が小難で濟で宜かつた、然が今年は餘ほど用心をしないと
此七八月頃まは何か金錢上の事に就て思ひも寄らない災
難がある　婦人「ヘーさうでせう　易者「ヘー
心當りのない事もせう　婦人「ヘーさうですか夫ハ妾しの方にも
から少し計り金を借て居ましてその期限が丁度七月の晦日
で座います　易者「ム、夫では其一件だ若しさう云ふ心當
りがあるなら其期限の來ない中に早く片を附て仕舞はな
いと先方の相手が甚だ惡い奴だから　婦人「ヘーさうですか

ねへ先方の相手と云ッても其貸主は此間死で仕舞て此世
にはもう居ないのですがねへ　易者「其人は死だからとて其
處の家には相續人もあれば書た証文が物を云と云事も有
婦人「イヱ其貸主と云のは妾しの實の伯父ですから証文も
何まも入れてはありません　易者「お前さんのやうよさう一
ゝ皮肉に出られては仕方がない　婦人「然ッて皆な違ッて居
ますもの　易者「縱ひ違ッて居やうとも其處を旨く聞て貰は
無けりやア私しの方の商賣にならない

○第十六　れ饒舌り女

冤下さい……お豐さんはお宅で座いますか、と一人の
中婆アさんが十一二歳の女の子を連て這入て來た、お豐と
云へるハ此家の女房、今去も盛所で何やらん洗ひ物をして

居りしが其の聲を聞つゝ急よ襖をはづしながら其處へ出て

お豐「オヤ何方かと思ッたら芝の伯母さんで御座いますか……祖母さん芝の伯母さんが入らッゐやいましたよ、老母が少し耳の遠い方なれば澄し込で老母「芝居がどうしたと……此節は耳が遠いもんだから芝居の話しを聞ても些とも分らないお豐「祖母さん芝居ぢやアありませんよ芝の伯母さんが被爲仰ッたのですよ老母「さうかへ芝の岡さんの話しかへ彼の人も此節はどうしたかノウお豐「アレ彼の通りで御座いますから本當よ困りますよ貴孃……夫です から時々親父と草鞋を間違へたり本當に貴孃大笑ひですよオホ、、、、……サアどう此方へお上り成すッて下さいませ……能くマア入らしッて下さいました……此樣なむさぐろしい家で御座いますが……オヤ〳〵マア子供が取ッ散かして……サアどう此方へ……お新ちやんのマア大きくお成りです事ねへ客「お豐さんもうお構ひ下さいますな餘り御無沙汰しますからね……お豐「どう致しまして……其處では御挨拶が出て來ませんから……マアどうぞ此方へ……何處に居らしッてもお直段は同じ事ですからオホ、、、、客「夫ではマア御免下さい……ハイ其後はどうも存外御無沙汰を致しまして お豐「どう致しまして手前からこそ一寸伺ひ度く〳〵と存じながら、御寶の通り年寄や子供ばかりですし、夫に所夫の商賣の方もお蔭樣でマア段々忙がしいものですから、夫や是やで遂ふく御無沙汰を致しまして誠よ申し譯が御坐い

ません、其癖昨夜も芝の伯母さんはどう成すッたか知らッて所夫ともお喧をして居たんですよ、夫に伯母さんも俺存じの通り所夫が彼の通りの出し嫌ひだもんですから、一すお墓参りに行ふと思ッてもナニ墓参りなんざァ仕なくても宜、自身が行くから宜、自己が行くから宜、てッたッて夫も行ったのやら行ないのやらサッパリ分らず伯母さんの前ですけれどイクラ女でも偶よやァ氣保養も去無けりやッサッサしまさァね、先日も上野や向嶋の花が奇麗に咲て大層人が出ると云ひますから子供でも連て一日見て來やうと思ッたらどうして〳〵大當違ひ、向嶋の花も綠日の花も同し事だ、夫よりか花より團子と云ふから團子でも買てお茶受にするが宜、お花見なんて洒落た事を云ふッて、頭でなしに

關云ふのですよ、妾しやァ何の因果で此樣な亭主を持たらうと時〳〵さう思ひますよ、夫だもんですから、と云ひ掛た處へ八百屋「今日は宜しうお豐」八百屋さん何がありますヘ八百屋「ヘイ相變らずの物ばかりで……ヱヽ、欵冬よ竹の子、蕗、慈姑、小根、不洗芋、田芹、糸蒟蒻、其外……お豐「さうですねへ小根ハ昨日のがまだある丈竹の子も宜が手が掛ッて行ず……今日はマア宜として置きませう……本當よお新ちやんの成長お成りです事ねへ、昨年お目に掛ッた時とは丸で見違へるやうですよ、何歳にお成りでしたッけねへ……さう十一に伯父さんもお樂丈ですねへ、お稽古い……さうですか常盤津を……今日は何を御馳走しませうねへお鮓もじよ仕ませうかお汁粉よしませうか客「もう〳〵出ですよ此

節は悪い癖が附まして、一寸外へ出ると吃度観音様へ行って其帰りは何か知ら奢る事と極って居るのでね本當に困ります夫も観音様へ行だけなら宜うございますけれど、行とサア彼品を買への此品が宜いのと種々なお望みが出るので蒼蠅くって〳〵ねへお前さんお豐「何處のも同じ事ですよ尤も彼處へ行と子供の欲がる物ばかり奇麗よ並んで居ますからねへ、夫でもお新ちやんなんざアまだ女のお子さんだから宜うございますが、自家の半公なんざア乱暴でお負よ親父が子煩悩と來て居るもんですから、観音様へ行てもモウ碌な物ア買て來ないのですよ、此間も伯母さん大きな弓を買て來まして、其邊中隣子でも唐紙でもバナリバナリと飛廻に穴を明るから、半公や危険からもうお止し弓を飛ばすするなら前の廣ッ場へでも出てお遊びと小言を云って居る中、とう〳〵猫の眼を打て片眼よ去て仕舞ました客「オヤ、マア可愛さうよ……然が男のお子さんは其位で無ければ行ません、どうしても女の子と違って荒ッぽう座いますからねへ、と話し中へニャーンと鳴て來た一疋の猫お豐「是れ渉覽なさい此通りお新「オヤ可愛い猫だことお豐「コレ役處へ行てお出で……お新ちやんお止なさいよ不潔い客「此娘はどう云ふものか幼少い時から猫が好でして、夜寝るのにも一所に抱て寝たり美好物があると自分は食ないでも猫に遣ッたりするものですから、猫の方でもだん〳〵贅澤になって此節ちやア鼠が何様なに暴れても些とも稼がないで困ります

お豐「ナニ伯母さん猫は鼠を捕な

い方が宜うございますよ

○第十七　書生の口論

夜、店商人はそろ〳〵荷造りをして自家を出で、職人は仕事を仕舞て歸り來るの游暮下宿屋へ歸って來た五六人の書生連何處で飲だか各自よへゝレケの氣味、平生でさへ餘り色氣のない風体なるよ、況て圖部八と改名した事なれバ其殺風景ハ云はん方なく、綿拂も見分ぬ程垢染た着物よ味噌汁の中から引張り出したやうな兵子帶を締め、頭には烏打帽子を阿彌陀に被り手には犬殺し、然たるステッキを携へ互ひに肩と肩に手を組みつゝ、昔しなら衣肝に至りと吐鳴る處を今は流行の壯士歌各ろく破鍋を叩く〳〵以たる聲を張あげて、

如何なればァ滅金細工の人アーマーたなァる、直よ跡からハーゲルとも」知るや知らずや鉄面皮、腹は五月の鯉なるに、博識顔する可笑さよ、フロックコートに高帽子、我より外には人なしと、盲目相手に八天狗、鬚を捻って紳士ぶり他人を蝗虫同様に、見下た處は立派だが、自説と云ふも一ッもない一から十まで受賣論、それゆゑ主義とて定まらず、股ぐら膏藥筒井、流民黨あるひは吏權黨、算盤づくなら何方でも、お望み次第よ御意まかせ」是で男子と云は

れョーの」片腹いたい事なるぞ、身は闘機の人形か、大和魂どこにある「お氣をターシかよターのむナーり

聲高らかよ謠ひ來れば、巡行の巡査は忽ちこれを認めて大喝一聲巡「モシ……一寸お待なさい甲書生「なんです巡査「君方は道路よ於て放歌するチウは不都合ぢや甲書生「ナニ僕等が放歌したと……其樣な事は決してない……失敬、誤魔化して行んとするを査公は引留め巡査「イヤお待なさい、今大聲で謠ふたのを慥かに聞たと乙書生「ム、彼れですか彼は放歌ぢやない我〻が愛國詩を吟じたのです巡査「縱ひ詩でもやらうが、歌ぢやらうが、往來で大聲を發すれば則はち違警罪ぢや、と此の問答が初まるや忽ち集る大勢の人、ソレ喧嘩だナニ巷説だと、一犬虚に吠て万犬實を傳へ、バタ〳〵

〳〵と先を爭ふて駈附る、中には撲りつけろと云ふ者もあれば打殺せと吐鳴る者もあり、査公が「あッちへ行け」の怒雷的よ一時はばら〳〵と四方へ散乱すれど、又〻奇來る飯の上の蠅、子供のある親達は心配して、危險から自家よお出と云へど小供は中〻聞入れず、査公は此大勢の野塵馬に取卷れつゝ巡査「君達がなんチウても高聲を發したるに違ひない純然たる現行犯ぢや甲書生「是は失敬極まる、現行犯なぢゝ人を罪人視するとは失敬ぢや僕等は愛國詩を吟じる事は吟じたが彼れゝ僕等の地聲ぢや決して大聲は發しない巡査「なるほど地聲なら地聲で宜が、シテ見ると今此處で發して居る聲は何です甲書生「是が則ち襄に發した處の聲と同一の地聲ぢや巡査「イヤさうぢやない先刻の放歌の方

が餘はど大聲ぢやッた甲書生「夫は少し大聲ぢやッたかも知らんが併し文章にも抑揚頓挫チウがあるやうなもんで、普通の言語にも抑揚あり又た頓挫も無けらにや成らん、故よ時としては大ぬなる聲を發し又時としては少なる聲を爲し或ひは抑へ或ひハ揚て調子を合せればこそ、人を去て感動せしめ或ひは悲憤せしめる事も出來るのでありませう乙書生「ヒヤ〳〵　巡査「お默止なさい甲書生「然るに若しも是に反して所謂るノベッ幕なしに、則ち抑揚もなく頓挫もなくして、始めより終りまで同じ聲を以て、談話なり若くは演説等をした時には如何なるものでありませうか、必らず人をして感動せしめ人をして悲憤の情を發せしめる事は出來ないでありませう乙書生「ヒヤ〳〵　巡査「お默止なさい……併ぢなながら聲よも大概極度チウもんがあるもんで、君達が今まで發した聲などは決つして普通の音聲チウもんぢやない即ち大聲ぢや甲書生「是ハ面白い聲よも大概極度チウもんがあると云はるゝが、然らば何の位が大聲の極度ぢやか夫を承はらう巡査「それは此處で答弁するの限ぢやない甲書生「ナセ此處で答辨が出來ないのです、答辨の出來ない事を何で云はれた巡査「イヤ答辨の出來ないチウ事はない甲書生「答辨が出來るなら承はらう巡査「それは此處でハ云はん署へ行てからお答へ申すから一先づ警察へお出なさい乙丙丁「ノウ〳〵〳〵、査公は此聲を聞て大ぬに怒れと巡査「默止れ……ノウ〳〵とハ何の事ッちや、苟くも警察官に對して餘り輕蔑した行爲ぢや……サア警察へ來

い甲書生「警察へ來いとは失敬ぢや巡査「何が失敬ぢや……サア此方と一所に來い甲書生「イヤ行かん理由のない拘引よは應じられない巡査「應じるも應じんもあるもんか……サア來い署へ來れば其の理由を云ッて聞せる甲書生「イヤ行かん巡査「行かんチウても警察權を以て拘引すると、將ま甲の書生に手を掛て引致せんとす、折から此處へ出て來た下宿屋の亭主亭主「一寸お待成すッて下さい……ヱヽ實は此人々は手前共に下宿して居る人でぼざ座いますが、何に致せ斯の通りの酩酊ゆゑ、自然貴官樣へ對しても粗忽な事を申しあげたか存じませんが、何れ醉の醒め次第私ゑ共から篤と意見も致しませうから、今日の處は何卒私しへお預けを願ひます甲書生「サア拘引するチウならして見ろ亭主「マア

お靜に……ヱヽ、誠ま恐れ入ますが今日の處へ何卒……と頻ま詫て居るを野痴馬は口眞似して野痴馬「サア拘引するチウならして見ローてやアがら……ワハーイ

○第八　偶然の寄合

アヽ好お月夜だと一人が縁臺に腰を掛て眺めて居れば、何時の間まか一人殖ゑ、二人殖ゑ、遂に門前市を爲しての高笑ひ、何の話しかと聞て見ればィヤモウ根も葉もない雜談ばかり甲「サア星が飛だ……星が自分の方へ向て飛で來ると、三年立ない中ま壽命が無くなると云ふが全くさうかも知れない、月に幾度となく星の飛のを見るが、例でも横ッちよか向ふの方へ飛で行く、本當ま奇態なもんだ乙「シテ見ると三年の間は生命保險つきだね甲「先づ其樣なものでせうテ

乙「先づ其様なものと眞面目で居るのが可笑しい……然が一体との星と云ふものゝ何だらう丙「星ゝ何だらうッて星と云ふから矢張り星サ……尤も星の中よも種ゝな星があつて、先づ家根にあるのが物ほし、大根を切て乾たのが切ぼしたもんだなゝ丙「下らなくて仕合せ下らうもんなら直に院避病と來るのだ甲「よく出るなゝ……然が近頃の窮理と か白瓜とか理屈ぢやゝ彼の星や月は動かないで、御同様よ斯して居る地球が何時となく、クル〳〵〳〵〳〵と廻り舞臺のやうに廻ッて居るのださうだが、人間の世界と云ふものゝ實に不思議なものだなゝ丙「君も隨分正直な人だ甲「ナぜだッて此地球が廻り舞臺のやうにクル〳〵

〳〵と廻ッた日にやゝ家も臓も轉繰返しを打て……甲「夫りやゝ行ない、其奴ゝ誰でも宜く云ふ口だが、物の道理から考へて見ると決して其様な譯のものぢやゝないさうだ丙「イヤ夫りやゝ駄目〳〵、何様な物の道理から考へても其様な馬鹿な話しやゝ無からう……早い話しがサ今西洋へ行のでせう、西洋へ行のゝ皆な千里の二千里のと云ふ海を渺舟ゝ乘て、三十日も四十日も掛ッてヤットの事で行のだが、若し地球が廻るとすりやゝ其様な迂遠な事をまないても宜ぢやないか甲「ナぜね丙「何故だッてお前さん人間が歩行ないでも地球の方でクル〳〵廻ッて呉るなら、畳間の中よ風船で空中へ上ッてシーッとして居る、さうすると地球がクル〳〵廻ッて夜の十二時か一時頃よやゝ、目の下へ亞米

利加だの佛蘭西だのが廻って來るから、其時に空中からイッと降て來りやァ只た一日で洋行が出來る譯だが、さう旨かァ所詮行くまいァ、、、此話しの最中へ通り掛ッた一人の男、これも矢張り懇意な中と見へて碌〻に挨拶もせず丁「大層面白さうだなァ丙「イヨ是ハ色男……ヤァ掛たまへ……今ね甲さんと地球の論をして一旗あげた處甲「どうして〳〵まだ一旗揚たとは行ないね……時に如何で す此頃のお景氣は丁「イヤハヤお景氣と云ッたら相變らず で……甲「相變らずよハ困りますねへ其癖田舍は大分景氣が宜と云ふぢやァあまりませんか丁「さうですか知ら、何よしても些たァ景氣が直ッて貰はないと何時までも此樣な事ぢやァ實に法が附ない乙「然が少し位景氣が直ッたからッ

て、是までの古疵を從前の通りにするまでは中〻の骨折ですぜ甲「夫りやァさうだが併し景氣さへ附きやァ、其處ァまた何にか法がつくサ丙「甲さんなんざァ其樣なに景氣〳〵とばかり云ッて居ないで、資本がウンとあるのだから當世風よ何かの製造場でもおッ建るとか、乃至また新發明の器械でも工夫して專賣でも受るとか、何か斯う一ッ目覺しい事をして世界中の金を一人占にしたら宜からう甲「さうサ爾しやうかとも思ッて居ますがねァハ、、、丙「ナニ常談ぢやァない、若しお望みとあらば金儲けの秘傳を御傳授致しませう甲「丙さんの傳授ぢやァ何時でも一杯食せられるからねへ……此間のやうよ人が眞面目よなつて聞て居りやァ、大坂と東京へ護謨の糸を引張て置て、其護謨の糸

でパチーンと人間を跳つける、是を新工夫の跳つけ旅行と云ふなんざァ驚いたねァハヽヽヽ折から此家の細君が茶の仕度をして持來り細君「大層お賑やかですねへ……ァお茶を一ッ」乙「是は恐れ入りました……お前さんは眼をどうか仕たんですか細君「ハイつひ二三日前から少し悪くて困りますが、多分流行眼でせう」乙「夫りやァ何にしてもお困りでせう、私しが宜い藥を教へて上げませうか細君「ハイどうぞ……」乙「夫りやァ造作も無い事です……乾物屋から粟ッ粒を少し計り買て來ましてね、夫を細ッかく細末して、凡そ六日も附て御覽じろ十日目位よりやァ吃度もう全癒ます」細君「へー奇態ですねへ」乙「本當に奇態です、然すからソレ六日の粟目十日よ利くとァハヽヽ滑稽長屋終

○餘狂　新聞紙雜報の口眞似

●二本足とは珍らしい　智惠も淺草山師町よ住む深井慾兵衛と云ふ男は此程古本の中に一本脚の人の住で居る國あり云ふ〳〵と書てあるしよりフト慾心を生じ此一本脚の人間を連て來て淺草の公園へでも見せ物よ出したらんよは奇を好む東京なれば忽ち大金の儲かるは必定と早速尻に帆をかけて彼の國へ渡航せし處彼の國の人〳〵い右の慾兵衛を見るや否なィヨー是は二本足の人とは珍らしいとて大勢よ捕へられ今は慾兵衛の方が却ッて見せ物にされて居ると云ふ

●贅談自遊變說會　來る三十二日午後十三時七十分より例の凡太樓よ於て開く同會の出席變士および其變題い（番

椒の辛きは山葵生姜の類にあらざる事を論じ併せて多食すれば鼻の先の赤くなる所以よ及ぶ)小松田物也(咏嚐と叢の喫分)馬鹿尾勇内(出鱈目出放題の説)高井田藏(何を以て盲目を盲目と云ひ蟇を蟇と云乎)平氣野平左衛門(死人よ口なしとは虚言にして口あれども言ふ事の出來ざる所以を論ず)何尾勇藏(他人に頭を撲り付られても決して怒らざる若へ木像なり)夢中作左衛門(河童の屁とは如何なるものゾ法螺吹助(酒のめば何處か心の春めきて借金取も鶯の聲たるの説)而野川厚(女郎にふられた男の面付を見て感あり)何賀何高)等の諸氏又た討論題は(犢鼻褌の裏表を見分る方法は如何)出題者馬戸鹿平(櫂兵衛が種を蒔に烏が之をホチクル櫂ありや否や)出題者拳骨痛(高い山から谷底見れば果し

て瓜や茄子の花盛りあるや否や)出題者是輪妙太の三題にて傍聽料は一人前文久錢の半價づゝなりと云ふ

●何者の所爲か　今月の只今鰻川四ツ這町なる或家の神棚の佛壇へ猫が犬の糞を放しゆゑコイツ憎い奴めと乳母の櫂助が半弓の鉄砲を以て只一突と爲さんとせしに其處は鳥類だけあり裏の高塀を這出して何處ともなく泳ひで逃げしと

●入札拂ひ　來る何日第何時難途省よ於て入札拂ひとなる品ふゝ火の車一代、不景木澤山、悲椎一本、貧棒一振、無鉄砲一挺、大法螺一個、無茶苦茶一袋、恥柿一本、面の皮一枚、膝共團子一串、野太皷一個、其外べら棒、ノッペラ棒、吝嗇棒、泥棒、等の厄介物よて望みの者は誰でも勝手よ脊負込む事を得べき

危則なる由

●放蕩息子の行衛　寒田貧乏町嘘八百番地鼻野下長平の長男野呂助（十三七ッ）はお月様と同様にまだ歳は若けれど曾て阿母の臍繰金を持出してノホヽンのやれこのサと瑯て或る遊廓中に手練手管を以て聞へたる娼妓手古鶴に現をぬかし雨の降夜もお天氣の好ときも夢我の夢中で涎を垂し居るとしを親父の長平ゝ元爪に火を燈し火の車を廻しながら拵へた身上とて人並はづれての大立腹早速野呂助よ禁足を命じ猶は時〻は燈心で縛ッて線香で撲り付るなどの意見を爲し居りしが野呂助は其の痛くも痒くもないのに堪兼もせず遂に去る二月三十一日の朝飯前儘よ三斗笠を堅に被ッて何の目的もなく出て行しまゝ今以て行衛の

知れざるより親父長平は流石に打棄ッても置ずと鉄の草鞋を穿て三年尋ね居ると云ふ

●全國有名頓鎭會　今度標題の如き倒ふしあるに付き諸國より其物代として出席する連中は先づ關東坂東太郎（利根川）四國よりは吉野三郎（吉野川）九州次郎（筑後川）近江よりは鮒野源五郎、三河よりは[illegible]後より は間田嫌角兵衛其他これに類する諸[illegible]頭數の揃ひし上へ牛にひかれて善光寺へ行[illegible]話し

●聞て吃驚　昨日の午前午後の頃弊[illegible]者が何か面黑種は無きやと鵜の目を鷹の目を烏鷺ついて居るし處大層な人立の中にて切たの[illegible]の生たの死だのと云ふ、大騒ぎゆゑ如何なる珍事が出來せしかと能く〳〵

聞て見れば何だ人を馬鹿にした是はデロレン祭文が敵き討の處を迂鳴て居りしなりと

●藥の賣出し　來年の事か來る年の事か知ねど何時か一度は賣て見度ものと己に百年も前から謂ふ時なる皆さん存じでも何でもない藥研堀町藥九層倍の馬鹿よ附る藥は活馬の眼から絞り取た龍眼肉と花鹿の角から引ヨ拔た熊の膽とを調合し是を腦味噌と年寄の繼ぎて賣た嘘の皮の智惠袋へ入れたる者なるが若し是を賣出す日よなつた日になつて見ると其直段ハ定めし高價かんべいとの事

●情化者の名前知れる　其むかし評判の高かりし桂川へ身を投た男女は誰しも知らぬ者はなき位なりしが其後義

太夫本よ就てよく〳〵調べて見るよ男は帶屋長右衛門女ハお半と云ふ者なりし

●珍書の出版　今度目玉繰玉堂より出版したる「吃驚仰天膽玉潰誌」と云へる書は滅茶ゝゝ居士の著作よて書中總て世の秘傳とすべき事を書列ねたるものなるが其中には隨分奇妙奇手烈の事あり今その一二を拔萃して見れば、鬼を笑はせるにハ來年の事を云ふべし、澁い顏を見るよは閻魔に塩辛を嘗させるべし腹の減たる時よハ飯を食ふべし、疊の上で泳げば土左衛門となる事なかるべし、雨天の日よ傘なくして非行ばビショ濕となるべし、寒中に裸体で居れば風邪を引べし、大人と赤ン坊と喧嘩すれば赤ン坊は必ずら負るべし、買物をするよは錢を持て行くべし、一圓紙幣

聞て見れば何だ人を馬鹿にした是はデロレン祭文が敵き討の處を迂鳴て居りしなりと

●藥の賣出し　來年の事か來る年の事か知ねど何時か一度は賣て見度ものと己に百年も前から潜有なる皆さん存じでも何でもない藥研堀町藥九厨倍堂の馬鹿よ附る藥は活馬の眼から絞り取た龍眼肉と花鹿の取から引ヨ拔た熊の膽とを調合し是を腦味噌と年寄の涎にて練た賺の皮の智恵袋へ入れたる者なるが若し是を賣出せば日よなつた日になつて見ると其直段ハ定めし高價かんべいとの事

●情化者の名前知れる　其むかし評判の高かりし桂川へ身を投た男女は誰しも知らぬ者はなき位なりしが其後義

太夫本よ就てよく〳〵調べて見るよ男は帶屋長右衛門女ハお半と云ふ者なりし

●珍書の出版　今度目玉漂ッ綠玉堂より出版したる「吃驚仰天膽玉潰誌」と云へる書は滅茶〻〻居士の著作よて書中總て世の秘傳とすべき事を書列ねたるものなるが其中には隨分奇妙奇手烈の事あり今その一二を拔萃して見れば、鬼を笑はせるにハ來年の事を云ふべし、澁い顏を見るよは閻魔に塩辛を嘗させるべし腹の減たる時よハ飯を食ふべし、壁の上で泳げば土左衛門となる事なかるべし、雨天の日よ傘なくして非行ばビショ濡となるべし、寒中に裸体で居れば風邪を引べし、大人と赤ン坊と喧嘩すれば赤ン坊は必ずら負るべし、買物をするよは錢を持て行くべし、一圓紙幣

と拾圓紙幣とを並べて何方でも勝手よ取れと云へば直に拾圓の方へ手を出すべし、夢で捨ッた金は通用せざるべし其他水を煮立れば湯となり酒を飲ば酔ふ排ふなど誰でも知り切た事を業〻敷く書立たるものにて近頃馬鹿〻敷一珍書

●公冶長の再來　昔支唐土の公冶長と云ふ爺さんハ能く鳥の鳴聲を聞分たと云ふ話しなるが是も矢張り其人の再來にてもあるか爰に鳥無里の蝙蝠と云へる男は酔興よも諸鳥諸獸の鳴聲を聞分る事を發明せし由なるが今其男の云ふ處を聞に牛はモウ〻馬はヒヽ〻猫はニヤーン犬はワン〻雀ハチウ〻鳩はポッポ鶯はホウホケキヤウ鴉ハカア〻と鳴く由又た同人が其鳴聲を集て近來流行

の繰かいな節を作りたるハ

鼠チウ〻猫はニヤン。牛はモウ〻馬はヒン。狼がキヤッ〻狐コン。犬のはへるはワンかいな。

●滑稽演説の筆記　昨三十五日彼の馬鹿野櫻よ於て難多加若闌氏が演説せられたる無茶苦茶筆記を得たれば左よ掲げてお臍で茶を沸す人のお笑ひ愚茶に供す

茶の説

辨士　難多加若闌

諸君、此處に茶の説と云ふ一茶意を擂ぎ出し茶るは、素より出茶羅目出放茶意ではぼ茶りません、又癖茶濃茶の効能をお茶べて茶人のか茶を持のでもぼ茶りません、し茶らば則ち何故よ茶の説と云ふ茶意を擂ぎ出し茶かと云ふに其意味茶るや甚だ深し、な茶〻以て空腹に茶漬を

茶ぶつくが如き無造茶な譯では浮茶りません……エヘン諸君よ、一茶い全茶い茶と云ふものは日本の名茶んにして、茶とひ番茶と雖も茶ん〳〵國の綠茶や赤髯國の紅茶の如きものでは浮茶らぬ事は諸君もよ茶已に知り茶もう處で浮茶りませう、故よ日本は一名を茶パンと稱し、殊に茶苦〳〵として歩を進むるの今日よあ茶ッては人の目茶魔膽茶魔を潰すと甘茶あり豈よ茶ゝに藝茶がお茶を挽ぬが茶めに茶ゝ無茶苦の安賣を爲し、待合茶屋が不景氣の茶めよお花の客を茶のみ歩くば茶りでは浮茶りませんれば茶とそ茶迦如來も日本へ浮茶ッて甘茶を浴び、孔子茶も甘てお茶の水の聖堂に祭れ其の茶茂林寺よは文福茶釜の茶から物あり、横町には茶菓兵衛さ

んと云ふ茶配人あり學茶には茶山茶ん陽あり、年寄には茶呑友茶ちあと道具には茶碗茶ら鉢茶柄杓あり、着物よは絹茶みじん茶格子あり、名僧は高野茶ん弘法茶い師にして茶い將には茶ゝ木の茶ぶ郎茶か綱あり、遊女が茶か尾で奴子が茶五平、茶いどころを茶の間と云ひ隱居茶んのお部屋を茶室と云ひ、葉唄に宇治茶あれば敵き討に天下茶屋あり、阿母の臍繰ぎん茶くを誤茶魔化す息子茶んあれば阿茶ま兀ても浮氣のやま茶る阿父茶んあり、お茶まには茶ッぱを被り足よは茶ぴを穿き、茶夫は義茶夫をか茶り藝茶は茶三線を彈き、茶いと持はよく茶弁繰てお客茶まの茶い屈を慰茶め、娼妓は茶ばこ一服を以て手く茶の茶い一と爲す、爺茶んは山へ芝苅に婆ァ茶んは川で

洗茶くし、與市兵衛は編の茶い布に五十両忠兵衛は三輪の茶屋で二歩殘し、阿房采羅經は茶かポコの水魚に出放茶いを茶辨くり、カッポレ坊主は甘茶鹽茶の出茶ら目を踊り、茶かい山から茶に底を見るべく、茶な引く雲の茶へ間には漏れ出る月の茶ぴあり、鈴木主水と云ふ茶むらいは女房もちまて子供が二茶り、茶ま〳〵逢へ逢ひながら松葉かん茶し茶ゝくみ茶ん、桃栗茶ん年柿八年柚は九年で花が茶く茶ゞとは〳〵　胴慾な茶なの茶る魔茶んを茶ッとおろし茶がひに見合す茶はと茶は、茶ん念至極とば茶りまて、目出茶く玆に隅茶川、イヤ斯う屁茶苦茶よな茶べき茶らば何時まで茶辨ッても茶い限のない事で茶り茶ますが、何まい茶せ茶の効能は斯の如きもので茶りま

すから、諸君に於ても是茶の事を能く茶知あつて、何卒浮世を茶にしてくら茶れん事を偏に願ひ茶てまつります、

○かく〳〵藝

○當世流行ゐんかいな節

○新聞紙

ひらけ行く世のその中に一際目だつ新聞紙
皆な御國と人のため筆がとりもつ文かいな

○よし原

いつも全盛よし原の茶屋の二階の大一座
勝たまけたの爭そひは酒が取り持つ拳かいな

○うらみ

男どゝろと秋の空かはり易いと知りながら
待ぞくらせど便りなく苦勞したいけ損かいな

○さくら狩

曇りし空も晴れわたり扨も愉快なさくら狩
下戸と上戸の差別なく花がとり持つ宴かいな

○夕立

さッと降り來る夕立に他所の軒端へ駈こんで
序に借る煙草の火是れも多少の縁かいな

○學校生徒

毎日かよふ學校に習ふ讀書おこたらず
いつも試驗に及第へふだん勉强の功かいな

○四君子

竹へみぞ雪の色かへず秋の眺めは菊の花
雪のなかよも開く梅香ひ高きへ聞かいな

○夫婦喧嘩

元は根も葉もない事よ大聲さげてさわぎ立
隣り近所の迷惑は是も因果な縁かいな

○開化の便利

遠くはなれて居るとても互ひよ心かはらじと
送る郵ぴん電ちん機これも開化の便かいな

○紙鳶

春のあそびも種々よあげる子供の奴子紙鳶
風にまかせてッヲ〳〵と糸が取持つ縁かいな

○自由の權

開けた御代のお蔭よは貴賤上下の差別なく
寐るも起きるも働らくも皆な自由の權かいな

○涼み船

夏の夕べのすゞみ舟吹よ川風簾よと
謠ふ二上り三下り月がとりもつ縁かいな

○結ぶ縁

酔ふたまぎれにッィ一夜結んだ夢が仇となり
きるに切られぬ今の仕儀これも宿世の縁かいな

○汽車の便

隅田と上野の花を見てすぐその足で吉野山
百里あまりを一日よ汽車がとり持つ便かいな

○洋癖家

日本普請もあきたとて建る煉化の二階家に
草木を植た外圍ひ目だつペンキの門かいな

○上戸

酒を過せば身の毒とおもふて平生する異見
それをお前は仇にしてオッよからんだ論かいな

○人の運

髮を生して高帽子くろぬり馬車に乗る人は
みんな艱難辛苦した智恵が取持運かいな

○待戀

堅い約束したものを主はなにゆゑ遲からう
人の心も察せずに進む時間の劍かいな

○人ちがひ

人目の多き往來で若しや夫れかとすれ違ひ
見れば全たく人ちがひ能く似た羽織の紋かいな

○ふられ客

宵にチラリと三日月の女郎は其まゝ顔出さず
鐘は上の方か淺草かわるい辻占マンかいな

○演説會

みやこ田舍をかしなべて盛んに流行る演説は
自由改進自治の主義口がとりもつ論かいな

○都々一

○ぬしの心に電話器かけて浮氣の異見がして見度
○歸り支度のつばめよ代て初會なじみの鴈のふみ
○云ふは情氣とかんにん袋ぬふて居るのも妻の義務

○壁に耳あり障子に目あり今ぢや柱がものを云ふ
○アレサか止よ夫や鑑札だ見れちや隱した年が無駄
○ゆめの浮世に生存居れば五臟病む樣な事ばかり
○可愛がられた籠をば逃て他所で苦勞をする小鳥
○夫と云ねど指れて猪口に浮ぶなさけを汲かはす
○文明開化の西洋でさへも色で仕わけた國の繪圖
○心の底のらサモ實らしく嘘ぢや無よと嘘をつく
○私しの命よ印紙をはつて主へ抵當に入れて置く
○墨よ思ひの戀路をこめて薫りもらさぬ狀ぶくろ
○酒も豆腐も自由な遊廓で聞は果報かはゝぎす
○はらも立つよい立せもすまい四海兄弟自主の權
○どうせ浮名の立上からは封せぬはがきの文使ひ

○主が秋風ふかせる故に私しやくよ〳〵氣を紅葉

○いろよ如才い内ゝ間夫よ着せる羽織の相ねづみ

○私計りかアレ見やしやんせ朝まで赤練に殘る月

○義理も情も碎かて見れば矢張り手管の上手下手

○主の浮氣を主にも云へず云て人にも云ぬ義務

○銚子かた手よ酬れる愛も溢さぬお酌のつぎ上手

○文を引裂き丸めてかんで怨みも奥歯の内で云ふ

○身ぐるみ剝れて殘ッた物は否だと抓ッた爪の痕

○肴はさんで出す杉ばしも主へみさほを松がた

○ぢらす積りか振る了簡かなぞゝ心をまはし部屋

○義理も道理もよく弁へて居りや社上手よ嘘を吐

○何まて此樣よ添れぬ抔と愚痴で見て居る三世相

○柔耀柔花に暮さうよりも二人自由の小なべだて

○破れ味噌漉持身となれば覺悟の中よも溢す愚痴

○万事もの事いたらぬ私し實の外にはない取り得

○憎らしいよと胷中を叩きコッツリ笑ふて覗く顔

○解ぬ紛れに切ては見たが跡ぢや矢張りつなく糸

○咲て蕊んで出來たる米も宝のなかにて二度の花

○一度ポッつり切たる後は音もきこへぬ糸ぐるま

○惡らしいゞへ夫者の癖にこゝろ引く氣か優言葉

○已が羽風よ鳴子をならす、獨とで氣を揉む群ら鴉

○ぬしは金性わたしは木性キかヲ苦勞は身の覺悟

○届た端書に名ハ無けれど氣象して出る家の首尾

○思ふ鮮ゞへモウ思はぬと思へば思いず思ひ出す

○寧そ問ふかイヤ問まいかたゝむ羽織の酒のあと
○堅いお前とおもひの外よ見掛ばかりの夏ごはり
○山家育ちの山葵も漬りや酸味でなかせる三杯酢
○今ぢや親父の免許うけて商標つけたる夫婦かな
○一段三畝と云ては見たが實地けん査ハ四畝八歩
○指を切のは昔しの泗落よ今ぢや指輪の比翼もん
○惚た同士はこゝろも空よのぼりつめたよ輕氣球
○寫眞で撮のは夫りや顔形ならば心がうつしたい
○秋の夜永も口説と痴話で夢もむすばず明のかね
○寧そ斷たら氣が安かろと云ふは迷はぬ人のこと
○ぶい意見に天窓を柿の甘い口から詫びことば
○煙い仕打の主やまき煙草のみ込ふりして口計り

○腐れ止さへある世の中になせか出來ない浮氣止
○一寸途中で降込られてこしをかけたが緑のはし
○味な文句に氣も引されてくるひ掛たる三味の駒
○泣てくらすも當座の勘め末にや身をひく秋の虫
○水を注れて焚つけられて胸を燒たりこがしたり
○元に當らぬ苦らうと覺悟ぬしよ誠のおろし賣り
○逢ふて思ひを夕立雲のはれてすゝ去い夏のそら
○白と黒とはわたしの胸にかいてお前よゆづる勝
○堅いやうでも時節が來れば落て本意ない鹿の角
○ぬしの稼ひと流行のペンキ初め美事ではげ安い
○身に引き當たる繪入の續話餘計な苦勞を新聞紙
○堅日は散行く花とも知らず色香よ迷ふて狂ふ蝶

○自烈た紛れに引裂く文が破れかぶれの事はじめ
○露と尾花の其いさかひの縺れ吹き解く朝あらし
○反對せぬ樣で反對するは濡れる心に降るとゝろ
○風がもて來る二階の端唄おもひある身の胸の釘
○吸付け煙草でのみ込む煙が胸を燃すの種となる
○鐘も怨まず寐みだれ髪も厭はぬ世帶の苦が仕度
○好よや嫌はれ嫌ひにや好れ今年や苦勞の年廻り
○夢もみじかい夏の夜あけて朱欒のとすは蚤の跡
○もやいつなぎし橋間の小ぶね浮た端頭の水調子
○曇るうわさも聞さへ附ば晴れて嬉しい梅雨の空
○人よ隱して書く千話文ハ筆にかさまで着て置く
○叩き作ちも疑はしやんす赤い西瓜の氣も知らず

○折ちや惡いとこゝろの胸を探ぐ櫻よ又たくるふ
○他所の浮氣のはとろび小口綻ふ針一ふく胸よきく
○家を出る時やわかれて出ても郵便袋で逢ふ手紙
○主を參られ嬉れしい樣でもしや夫かとッイ悠氣
○苦らうする墨すらるゝ硯戀もうすひもぬし次第
○くらひ夜あそび明りをたてゝ歸る門ぐち螢かで
○逢ば別れが苦勞になると云て逢ずにや居られ無
○聲が高いと押へた口の指からもれ出し立つ浮名
○ふゆの仕度かいづれの凹も木ゝは錦の織くらべ
○くるふ磁石と浮氣なぬしゝ何處が北やら南やら
○のぼる旭日にふくろを冠せばし留たき春の雪
○ぼけの花だと人目にや見て針持お前の木が知ぬ

○實と手管となさけと金は粋な權衡のかけ工あひ
○道の時雨はなみだで來たが笑顔うれゑい初紅葉
○丸くわたるが私しの旨味ぬけ目ないぞへ新鋼貨

○おどけ都々一

○いくら食ても飽きないものは米の飯と親のすね
○口もかるいがお尻も輕い夫でも孕めば身は重い
○儘よくで遊んで居ると粥も食なくなるけふ日
○意苦地無とは承知で居たが金錢ないのは當違ひ
○自惚鏡で見てさへ是ぢやふられる筈だと思ふ顔
○腹が痛くて丸藥かんでいやなお客に苦がわらひ
○窓の隙からこぼれた光りお前の天窓を月と見た
○嚏ア氣ぢりか其の口上を自己が歸ると誰に云ふ

○人は知らねど氣が氣を咎め尻で殺した屁の臭さ
○羽織隠して留ては見たが待よお金は無からうか
○別れが怨くて泣のぢや無よ一寸撮んだ芥子あへ
○粥で半つきお芋で十日あとの五日は屁も出ない
○野暮な說論の長たらしさに袖で次伸の蓋をする
○聞た異見も尻からぬけて屁とも思はぬ惚た同士
○連動は宜けれどけふ日は止な米の高のに腹が減る
○一筋細では行ない奴が三筋の糸よはゑめられる
○粋な男とおもふて居たよビール飲せりや澁い顔
○お前のやうなる牡丹餅面に何で燒餅やくものか

○文句入とゞ逸

○立つ手をおさへてマア待たしやんせはうた「どうでも今

日は行んすかと云ひッ、立てれんじ窓障子ほそ目に引あけてどゞ一「ちばし留たき今朝のゆき

○なんの因果で此やうに清元浦里「逢ふた初手から可愛さが身よ染ゝとはれぬいてどゞ一「ほんにお前は男な人

○外よ心のうつりしお前「それより私しが嫌ならば獨り來來へ行てをや男心はさうしたものかどゝ一「見捨られても忘られぬ

○人目はゞかる二人の中は「かくせど色香梅の花どゞ一「いつか他人に嗅出され

○口ぢや云はねど心でとめて「屏風一重のそなたよは未だ陸言の聞ゆれどわれは見たらぬ夢をさきどゞ一「氣づよく歸すも主のため

○日增よ驅理はひらけるゝれど「回向しよふとてお姿を寫しとらせはせぬものを魂ひかへす反魂香藥の力もあるならば可愛とたつた一言のどゞ一「もの言ふ寫眞がなせ出來ぬ

○かなしや眞實つくして見ても廿四孝「つとめする身はイザ知らず姫御前のあられもない殿御よ惚たと云ふ事が嘘いつはりに云はれよかどゞ一「虛言と手管で茶にせられ

○ぬしの爲とてかんなん苦勞「人目をのびて逢坂の關よりつらい世の習ひどゞ一「とげて女房と云はれたい

○口と云ふ奴ァ調法なものよ「世事でまろめて浮氣でこねてどゞ一「虛言を眞實とかもはせる

○雷よつれて降り出す彼の夕立の小簾の戸「獺ようれしき男の力ジット手よ手をなんにも云ハず二人してつる蚊帳の紐ぞゝ」「はれて嬉しい月の顔

○神をたのんでお前の御闇お七「ちくさ結びを二度三度結びかはせし嬉しさに私しが紋のかんざしへぞゝ」「吉と出てさへうたがはれ

○今日は土曜とこゝろで待てはうた「君來ずば寐屋へハ入らず柴の戸へ出ては歸り歸りてハぞゝ」「獨りくよ〳〵蚊帳の中

○目元に紅葉の愛敬みせて二段目「小涙ハはつと手をつかへッッと見かはす顔と顔互ひの胸に戀人と物も得云はぬ赤面は梅とさくらの花角力ぞゝ」「鹿と返事が出來かねる

○おもひ屆いて嬉しい夜半と「ほの〳〵と雀さへずる奥座敷燈し火えめす男ども屏風一重の其方にはまだ睦言の明殘るぞゝ」「たのしむ間もなく白む窓

○あやめも分らぬ戀路の暗に忍ぶ姿のほふかむりイむ軒端見覺への慥よ此處ゞと門の戸をぞゝ」「爪で知らせる外と内

○君の來ぬ夜は寫眞を詠め「お内儀のある事を初手から私しが知ッたなら斯はれ過はせぬものをぞゝ」「おもひ切られぬ此の美顔

○狂言されたをッィ眞に受て「袖も袂もくひさき食ひ裂き乱れ心のみだれ髪ぞゝ」「清姫もどきも戀の癡

○親は子ゆゑに子は戀ゆゑに三代記「どちらが重い輕いやら戀と恩との義理づめにぞゝ」

○土手の柳にッィ招かれて清元北州「霞のころも衣紋坂にもんつくらふ初買に花の江戸町京町や脊中あはせの松が枝よ松の太夫の見返りは柳さくらの仲の町ぞゝ」

「悪方まぬりの道迷ひ」

○卒業しやんすを樂しみ暮し「たとへ焦れて死ぬればとてどゝ」

「勉強のお邪广が何のまァ」

○酒が云はすがお前の邪見「つもる口説の其中にとけし島田のもつれ髪ぞゝ」

「ぢらして泣すが樂しみかくるわ通ひのお客と見かけ「イザ事問はん悪方さゝぞゝ」

「聞で引出す人力車」

○月が高いと汐干が落度汐くゝ「迄ふた其夜はッィ轉び寐の帶も解ぬで夫なりに二人がすそへかり衣かけてゞ頼む睦言のぞゝ」

「夢も見ぬ間に明からす

○香水シャポンの色香よまよひ歌澤「樣子うるのがお前の家業ぞゝ」

「のつた私しは開化ぶり

○女の生徒が浮氣になりて朝顏「こがれ初たる戀人と語ら

ふ間さへ夏の夜の短かい奴りの本意ない別れ處たづぬる便りさへ思ふよ任せぬ國の迎ひぞゝ」

「卒業せぬ間に歸縣する

○意氣な音じめのアノ涼み船「オヤおつう遣て居やァがる

ぜ船の中「うそと誠の二瀬川だまされぬ氣でだまされて

末は野となれ山となれ私がおもひは君ゆゑならば三又

川の船の内心の内をかん察し「ナンダ差しむかひで酒落て居やァがらェ、畜生めどゝ」「またも聞ゆる鼠なき

○れんじ引あけ空うちながめかきのゝし「まだ寐もやらぬ手枕よそでもない事思ひわびうつら〳〵と更てさへ寐まきの衣の肌うすきどゝ」「どうでも今宵は待ぼうけ

○思ふ事とかく夢路にかよわすものよ夕露「あけ暮戀ゑき夫の顔を氏るよと嬉しく走りよりどゝ」「逢ふたと思へば目がさめた

○緣と云ふ奴ァふゑぎなものよ「なよやら草紙に書たのを其方に見せて問ふたらば戀と云ふ字と云ふたのを結び初めの殿御ぢやとどゝ」「筆や草紙が仲人する

○かりと燕がッィ行き逢ふて「イヨお雁さん戀の飛脚かね

「たとへ枕は替さずとも云ひなづけすりや女房ぢやものナゼ文でなと云ふて越ては下さんせぬ「チョット御覽なさいよチ此文をどゝ」「いつも痴話よは困り切る

○無理な願ひもおまへに添ふて「天神さまへ願かけて梅を一生斷たゞへ其お蔭やら嬉しい返事二世も三世も先の世かけて誓ひゑ中ぢやないかいなどゝ」「夫婦なかよく暮したい

○わたしや主ゆゑ主や私しゆゑ「野暮な田舍の暮しよも機も織いちん仕事どゝ」「なれぬ世帶よ苦勞する

○秋とおもへぬ夜の短かさよ「宵に寐よとゝ後朝よせかれまいとの戀の欲どゝ」「日の出ぬ世界があればよい

○思ふお方に途中で別れ雲林院「いとゝおぼろ夜に降るは

春雨か落るハ涙かと袖うち拂ひ裾をとりたゞ〳〵すでに〳〵とたどり〳〵も迷ひ行くぞゞ一「戀の迷子になるわたし

○枕あひ手よ寫眞をながめ當世太鼓「玄らぬ顔にて出給ひし其の面顔ハ身にそへど眞の主はなきあとのぞゞ一「主とそひ寐をしたてゝろ

○玄んの夜半よフト目を覺し「オヽ怖かッた「オヤどうしたへぞゞ一「人に切られた夢を見た

◎葉唄の變調

○宇治ハ茶處

秋は風情もさま〳〵に月になき立つ機織虫と人の氣に合ふ耳よつく〳〵草も露もつ寂た庭さびた景色の玄はらしやコリヤ〳〵六三の國ぢやものの

○あさくとも

隅田川ながす燈籠みやこ鳥涼みがてらの船の中こつそりとした差向ひ是も保養ぢやないかいな

○一ト言

一言を十言よかへす山の神口おしからうがモウ此樣な虛言にも野蠻は止めにしてエヽ呉んかへ

○我戀

我戀ハ糸はりがねの電信機渡すにや遠し渡さねば思ふ便りが聞れない

○月は重なる

月は重なる利足はつもる何しよぢいな嵩む何しよぢいな

身代限りをするわいなオーサ捨とけ放とけ

○雪ゝ巴

顔をしきりと打ながめ身にしむ夜半のさむ風にお風めすなと聲ひそめ呼べどかこせど答へなくアレ狸寐入りぢやないかいな

○夕暮

きぬ〳〵に寐まきの儘のあどけなく送る廊下の短かさも又の逢瀬の辻占かアレ待なまし待なまし羽織を直してあげんせう

○今朝の雨

今朝のなア雨にグッスリと又た寐つゞけの無性者やぶれし儘の夜具の裏かぴは生るし半風子はたかるモウシ隣り

の人へ今の時計は何時じやエ、アレ聞ひます茶を一ッ序に煙草の火がほしい

○忍ぶ戀路

主を待つ夜ゝさてはかなさよ門の戸たゝく夜嵐や閨よ影さす鳥影も若しや夫かと胸さわぎ

○字ば玉

玉簾の内やゆかしき涼み舟意氣な音〆の爪びきも人目をかねし忍び駒たのしい中ぢやないかいな

○更て逢ふ夜

蒸たお菊を食ふた夜は人目をのねて放屁さへ遠して見まわす顔とかは眼よ染む臭さ袖あてゝアレ息ばるなつまるゞへ傍で嗅身の其つらさ

○春雨

夏の夜よしつぱり汗の三ッ蒲團すゝ風さそふ蚊帳のうち千話にたわむれ面白やかむろでさへも一すじよ間夫をもつ身の氣ハ一ッ私しや苦海よ主は船やかて晴て濱につくならばサアイ嬉しからうぢやないかいなサッサ日和をまつわいな

○地口

末は野となれ山となれ
秋は紅葉の海晏寺
粹は愚となり野暮となり
雪は旅路の先案事
沖の暗いのに白帆が見へる
樺花一日の栗
夜着の古いのよ虱が殖る
近火一々の鯉

地獄の沙汰も金次第
釋迦に說法
地口の馬鹿も書次第
馬車に馬丁
暗ま鉄砲
義を見て爲ざるは勇なきなり
上ま憲法
火を見て烹ざるは牛なきなり
學んで時に之を習ふ亦た悅こばしからずや
摘んで時に之を食ふ亦た旨からずや
人間万事塞翁の馬
近年男子西洋の姿
圓い卵も切樣で四角
人の噂さも七十五日
鱠たなでも釣得て歸宅
井戸の深さも七十五尺
論より証據
按摩ァ上下三百文
ドンなり正午
秋刀魚ァ數の子三杯酢
何樣でも其樣なら行んすか
買ても損なら止さんすか

俳優の不品行
學者の不人望

世辭で丸めて浮氣でこねて
化粧で間拔で嘘言ついて

人觸れば人を斬り馬觸れば馬を斬る
無地流行れば無地を織り縞流行れば縞を織る

千里同風
權理同等

其鬼に非ずして之を祭るは諂ひなり
其器ゑ非ずして之を用るゝ間違なり

泰山を挾さんで北海を越ゆ
大變を引起して厄介を掛く

比翼連理の契
至極便利の地割

嘘から出た誠
裾から出た眞綿

お前ばッかり出世して
名前ばッかり出家して

餘狂終

明治廿六年十月廿三日印刷
明治廿六年十月廿六日發行

著者　淺草區須賀町十九番地　西森武城
發行者　神田區美土代町三丁目十五番地　島田勘次郎
印刷者　神田區南乘物町十五番地　鈴木源四郎
印刷所　神田區南乘物町十五番地　九皐館活版所

滑稽長屋

版權所有

發兌所　神田區美土代町三丁目十五番地　共隆舍

9126

賣捌所

日本橋區本石町二丁目　上田屋書店
日本橋區通四丁目　金櫻堂書店
日本橋區横山町三丁目　辻岡屋書店
日本橋區大傳馬町二丁目　長島書店
日本橋區通油町　藤岡屋書店
京橋區南傳馬町二丁目　目黑書店
京橋區南傳馬町二丁目　嵩山堂書店
淺草區三好町　大川屋書店
大坂東區順慶町　中川書店